

茨城県教育財団文化財調査報告第369集

古館明神脇遺跡

萱丸一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成 25 年 3 月

独立行政法人都市再生機構
首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部

公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第369集

ふるだてみょうじんわき
古館明神脇遺跡

萱丸一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成 25 年 3 月

独立行政法人都市再生機構
首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部
公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、つくば市を日本における科学技術の研究開発の中核都市として、さらには国際交流の拠点としてふさわしい街にすることを目指して整備を進めております。

その街づくりの一環として、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部は、つくば市萱丸地区において「つくばエクスプレス」の沿線開発を進めており、沿線地区の土地区画整理事業を計画的に推進しています。しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である古館明神脇遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成21年4月から8月までの5か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、古館明神脇遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成25年 3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社（現 独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部）の委託により、財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）が平成21年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字古館字神足脇145-2番地ほかに所在する古館明神脇遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成21年4月1日～8月31日
整理 平成24年4月1日～6月30日
- 3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	白田正子	平成21年4月1日～8月31日
主任調査員	小林和彦	平成21年4月1日～8月31日
主任調査員	齋藤和浩	平成21年4月1日～4月30日
主任調査員	中島理	平成21年4月1日～8月31日
調査員	前島直人	平成21年4月1日～4月30日
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、首席調査員綿引英樹が担当した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = +1,440 \text{ m}$ 、 $Y = +21,440 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A、B、C…、西から東へ 1、2、3… とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a、b、c…j、西から東へ 1、2、3、…0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SD - 溝跡 SI - 堅穴住居跡 SK - 土坑

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器

土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩		炉		粘土範囲		煤
	土器		土製品		石器・石製品		金属製品
	硬化面		焼土・粘土範囲				

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 現存値は () を、推定値は [] を付して示した。計測値の単位は m、cm、g で示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 堅穴住居跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
古館明神脇遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 古墳時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 土坑	64
2 その他の遺構と遺物	68
(1) 土坑	68
(2) 溝跡	69
(3) 遺構外出土遺物	69
第4節 まとめ	71
写真図版	PL 1～PL16
抄 録	
付 図	

古館明神協遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

古館明神協遺跡は、つくば市の南西部に位置し、西谷田川と高岡川に向かって延びた細長い標高 20 m の舌状台地の東部に立地しています。

当遺跡の調査は、「つくばエクスプレス」の沿線開発にともない、遺跡の記録・保存を目的として茨城県教育財団が行いました。



調査の内容

平成 21 年 4 月 1 日から 8 月 31 日まで 10,128㎡ を調査しました。その結果、古墳時代中期（約 1,600 年前）の集落跡であることが分かりました。確認された遺構は、たてあなじゆうきよあと 竪穴住居跡 15 軒と どこう 土坑 2 基、ほかに時期不明の土坑 3 基と みぞあと 溝跡 1 条です。主な出土遺物は、はじき 土師器（つき 坏・わん 椀・かん 埴・たかつき 高坏・つば 壺・かめ 甕・こしき 甑・み 甌・こ ミニチュア土器・てづくね 手捏土器）、すえき 須恵器（は 坏・ほ 甌・は 甕）、どたま 土製品（土玉）、いし 石器（やじり 鎌・ぼうすいしや 紡錘車・といし 砥石）、せきせいも 石製模造品（せうひん 白玉・うすだま 双孔円板）、そうこうえんばん 金属製品（とうす 刀子・かま 鎌・せんか 銭貸）などです。



調査区全景（南上空から）



第2号住居跡完掘状況



第3号住居跡完掘状況



当遺跡から出土した須恵器



第3号住居跡貯蔵穴の遺物出土状況

調査の結果

出土した土器から、5世紀の中頃に集落が営まれていたことが分かりました。住居は、広場を中心として楕円形状に配置されており、計画的に建物を建てていたようです。また、大形の住居の近くに小形の住居が建てられており、住まいと作業やものを貯蔵する建物を分けていた可能性もあります。

白玉や双孔円板がまとめて出土している住居跡も確認されました。これは、廃絶に伴うマツリを行っていたことを裏付ける資料と言えます。炭化材や焼土が土器と一緒に出土している住居跡もあり、意図的に焼却されたと考えられます。当時のマツリがどのように行われていたのか垣間見ることができます。



出土した鉄鏃

搬入された須恵器や県内でも出土例の少ない鉄鏃が出土したことから、貴重な品物を手に入れるだけの力を持った有力者がいたと推測でき、有力者を中心にした当時の集落の様子やマツリの様相が見えてくるようです。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成9年3月17日、住宅・都市整備公団（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に、平成16年7月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に、平成23年7月から独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部に名称を変更）つくば開発局長は、茨城県教育委員会教育長に対して、萱丸一体型特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は平成19年度に現地踏査を、平成20年11月25、26日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。

平成21年1月27日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、事業地内に古館明神脇遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成20年2月15日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社つくば開発事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成20年3月10日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社つくば開発事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成21年2月19日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は、茨城県教育委員会教育長に対して、萱丸一体型特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。

平成21年3月11日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、古館明神脇遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団（平成24年4月から公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成21年4月1日から8月31日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

平成21年度の調査経過については、その概要を表で記載する。

工程	期間				
	4月	5月	6月	7月	8月
調査準備 遺構確認	■	■			
遺構調査			■	■	■
遺物洗浄 写真整理			■	■	■
補足調査					■
撤収					■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

古館神脇遺跡は、茨城県つくば市大字古館字神足脇 145 - 2 番地ほかに所在している。

つくば市は、県の南西部に広がる標高約 20 ~ 25 m ほどの平坦な台地上に位置している。この台地は、筑波台地と呼ばれ、北東部には筑波山を主峰とする筑波山塊がある。台地の東部を霞ヶ浦に流入する桜川、西部を利根川に合流する小貝川に挟まれ、それらの支流を含めた中小の河川によって大きく開析されている。流域には標高 5 ~ 10 m の沖積地が発達し、谷津や低地が細長く入り込んでいる。

当遺跡が立地する筑波台地は、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部で、地質的には、貝化石を産する成田層を基盤とし、砂ないし砂礫層である竜ヶ崎砂礫層、火山灰質粘土層である常総粘土層、関東ローム層の順に堆積しており、最上部は腐食土層となっている。

古館神脇遺跡は、筑波台地南端の西谷田川と高岡川の合流点に向かって延びた細長い標高 20 m の舌状台地の東部に立地している。遺跡の東側は西谷田川に向かって崖になっており、比高は約 12 m である。当遺跡とその周辺の土地利用の現状は、台地上は山林及び畑地で低地は水田として利用されている。

第2節 歴史的環境

谷田川や西谷田川流域の台地上には、河川に沿って数多くの遺跡が分布している。ここでは、当遺跡 (①) 周辺の遺跡を時代ごとに記述する。

旧石器時代では、西谷田川左岸の台地上に下河原崎谷中台遺跡や鳥名ツバタ遺跡、元宮本前山遺跡などがある。下河原崎谷中台遺跡では石器集中地点が 2 か所確認され、ナイフ形石器や角錐状石器が出土している¹⁾。元宮本前山遺跡では石器集中地点が 1 か所確認され、ナイフ形石器や石核、台石などが出土している²⁾。

縄文時代の遺跡は、谷田川と西谷田川に挟まれた馬の背状の台地に谷田部漆遺跡 (9)、谷田部福田遺跡 (13)、谷田部福田前遺跡 (14)、鳥名前野遺跡、鳥名前野東遺跡など、多くの遺跡が存在している。当遺跡と同じ台地の南西 500 m ほどに位置する根崎遺跡 (2) では、縄文時代早期の住居跡 4 軒のほかには炉穴 9 基が確認されている³⁾。西谷田川右岸の台地縁辺部に位置している境松貝塚⁴⁾ (48) では、中期から後期の土器や石器だけでなくオキシジミ、ムラサキガイ、シオフキなどの貝類も出土しており、当時、この台地の際まで海水が迫っていたことがわかる。谷田川や西谷田川を望む台地縁辺部では、縄文時代中期から後期にかけての土器や石器が広範囲にわたって出土しており、この時期から本格的に人々の生活が営まれるようになったと考えられる。

弥生時代の遺跡は、縄文時代に比べて少ない。当遺跡の周辺では、中期から後期の遺物が出土した境松貝塚⁵⁾、下河原崎高山遺跡が確認されている。

古墳時代の遺跡は、当遺跡周辺では縄文時代に次いで多く確認されている。前期の集落は、鳥名熊の山遺跡、鳥名前野遺跡、鳥名前野東遺跡などで確認され、鳥名前野東遺跡では集落に付随して方形周溝墓 3 基が調査されている⁶⁾。これらの集落はいずれも小規模で、谷田川に沿って兩岸に点在していたと捉えることができる。中期の集落は、前述した遺跡に加えて谷田部漆遺跡や真瀬三度山遺跡 (7)、上萱丸古原敷遺跡 (8)、鳥名ツバタ遺跡、元宮本前山遺跡、下河原崎谷中台遺跡などが確認されており、西谷田川沿いにまで広がりを見

せるようになる。当遺跡と同じ台地上に立地する根崎遺跡では、住居跡が12軒、西栗山遺跡〈6〉では住居跡が6軒確認され⁷⁾、西谷田川と高岡川に挟まれた台地南部にもこの時期の集落が広がっていることが明らかとなった。集落は、台地の縁辺部や低地へ向かう緩斜面部に営まれており、谷田川や西谷田川によって開析された谷津が集落の立地や営みに影響を与えていたものと考えられる。谷田部地区では、谷田部台町古墳群(18)、谷田部中城古墳〈30〉、羽成古墳群(25)、谷田部遠見塚古墳〈39〉、高岡古墳、下横場古墳群、面野井古墳群、鳥名関ノ台古墳群、高山古墳群、下河原崎古墳群など、古墳群11か所、古墳約300基が確認され、県下でも古墳が多い地域といえる。後期の集落としては、根崎遺跡で住居跡5軒、西栗山遺跡で住居跡24軒が調査されている⁸⁾。また、当遺跡から北へ5kmに位置する鳥名熊の山遺跡は、6世紀後半には鳥名地区の中心集落として発展したと考えられている。古墳時代をとおして遺跡の分布状況を見ると、年代の経過とともに集落が台地の縁辺部から内陸部へと移動していく様子がうかがえる。

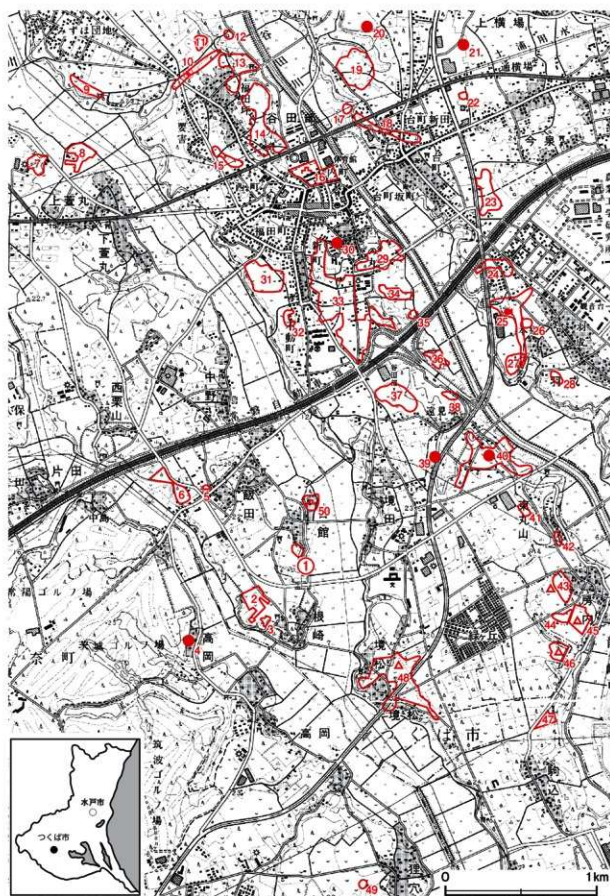
奈良・平安時代のこの地区は、谷田部地区は河内郡八部郷といい、仁徳天皇の時代に後の矢田若部女のために谷田部を置いたところと言われている。この時代の遺跡は、当遺跡の周辺では少なく、根崎遺跡で住居跡9軒が確認されているのみである⁹⁾。西谷田川流域でも遺跡数は少なく、谷田部漆遺跡、真瀬三度山遺跡、上葦丸古屋敷遺跡などで住居跡が確認されている。谷田川沿いには多くの遺跡が確認されており、左岸の羽成北久保北遺跡〈26〉や羽成北久保南遺跡〈27〉、右岸の谷田部本郷北遺跡〈36〉や東丸山屋中遺跡〈42〉などが知られている。さらに、鳥名熊の山遺跡では、住居跡2,400軒以上、掘立柱建物跡380棟以上が確認され、鳥名前野遺跡や鳥名前野東遺跡などでもこの時期の住居跡が確認されている。

中世以降、谷田部地区は常陸平氏本宗平直幹の支配下にあり、常陸西南部をおおう広大な常安保は南野牧とともに村田荘の一部であったが、南野牧の分離とともに村田荘だけになり、12世紀末にはさらに下妻荘、田中荘を分出し、八条院領として伝領された。谷田部地区の大部分は田中荘城に入っている。下妻荘、村田荘の下司職は下妻広幹に、田中荘の下司職は多気義幹に伝えられたと推測されている。しかし、鎌倉幕府の成立後、八田知家(小田氏)の入部により義幹は没落し、田中荘は小田氏の支配下に入っている。1285年の霜月騒動により一時期田中荘は北条得宗家の手に移るが、室町時代になりふたたび小田氏の手に戻っている。当時、小田配下の土豪には小野崎の荒井氏、苜間の野中瀬氏、鳥名・面野井の平井出氏がいたと伝えられており、勢力関係の推移が激しく、それに伴い、熊の山城、谷田部城〈16〉、高須賀城、小坂城、古館〈50〉、小野崎館、苜間城、面野井城など数多くの城館が築かれている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の該当遺跡番号と同じである。なお、本章は、財団報告第292集・349集を基にし、若干加筆したものである。

註

- 1) 高野裕隆「下河原崎谷中台遺跡 鳥名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第282集 2007年3月
- 2) 高野裕隆「元宮本前山遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第265集 2006年3月
- 3) 寺内久水「西栗山遺跡2 根崎遺跡2 葦丸一休型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第349集 2011年3月
- 4) 久野俊彦「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 境松遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第41集 1987年3月
- 5) 註4に同じ
- 6) 寺門千壽・田原康司・梅澤貴司「鳥名前野東遺跡 鳥名境松遺跡 谷田部漆遺跡 鳥名・福田坪一休型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第191集 2002年3月



第1図 古館明神脇遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院 25,000 分の1「谷田部」〔藤代〕)

表1 古館明神脇遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代									
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世		
①	古館明神脇遺跡			○				26	羽成北久保北遺跡		○		○	○	○	○			
2	根崎遺跡		○		○	○		27	羽成北久保南遺跡					○	○	○	○		
3	根崎八幡窪遺跡		○		○			28	羽成谷津台遺跡										
4	高野古墳群				○			29	谷田部裾遺跡					○	○	○			
5	飯田大塚						○	30	谷田部中城古墳					○					
6	西栗山遺跡		○		○			31	谷田部西原遺跡					○	○	○	○		
7	真瀬三度山遺跡		○	○	○	○		32	谷田部不動台遺跡						○				
8	上堂丸古屋敷遺跡			○	○	○		33	谷田部槽下遺跡					○	○	○	○		
9	谷田部漆遺跡		○		○	○		34	谷田部宮下遺跡						○			○	
10	谷田部大堀遺跡						○	35	谷田部新郭前遺跡						○	○	○		
11	谷田部陣馬遺跡		○	○	○		○	36	谷田部本郷北遺跡						○	○	○		
12	谷田部山合遺跡		○				○	37	谷田部本郷西遺跡					○	○	○	○		
13	谷田部福田遺跡			○	○			38	谷田部本郷東遺跡					○	○	○	○		
14	谷田部福田前遺跡		○		○	○		39	谷田部遠見塚古墳					○					
15	谷田部漆出口遺跡		○		○		○	40	谷田部第六天下遺跡		○		○	○	○				
16	谷田部城跡						○	41	谷田部長堀北遺跡					○					
17	谷田部下成井遺跡		○					42	東丸山屋中遺跡		○			○					
18	谷田部台町古墳群				○			43	谷田部長堀貝塚		○			○					
19	谷田部台成井遺跡		○					44	谷田部長堀南遺跡		○		○	○					
20	谷田部カロウド塚古墳				○			45	房内貝塚		○		○	○					
21	上横場道心塚古墳群				○			46	東丸山貝塚		○			○					
22	上横場善正遺跡		○		○		○	47	房内南遺跡		○		○	○			○		
23	谷田部中塚遺跡		○				○	48	境松貝塚		○	○	○						
24	谷田部山崎遺跡		○		○			49	狸穴遺跡		○								
25	羽成古墳群				○			50	古館跡								○		

7) a 渡邊幸雄「(仮称) 豊丸地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 根崎遺跡 西栗山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第119集 1997年3月

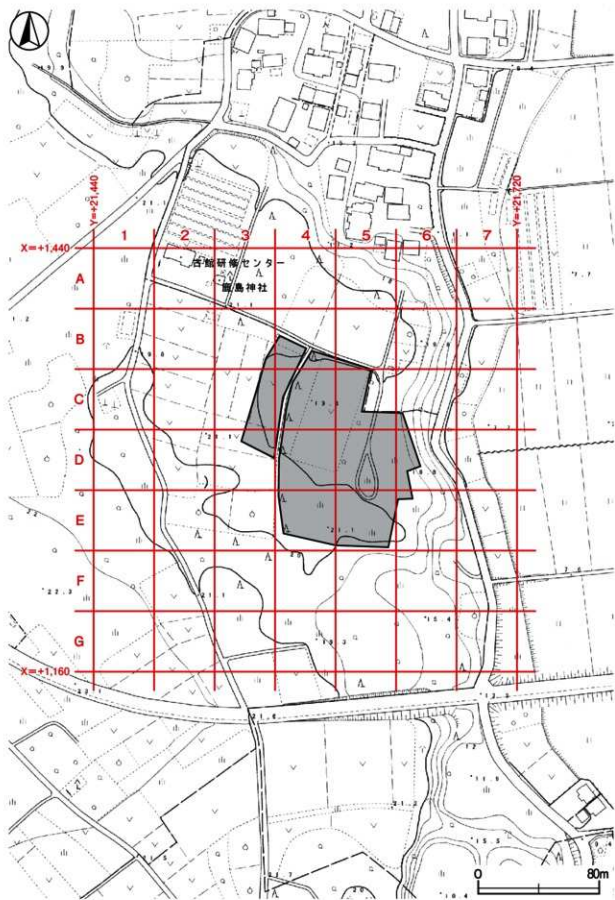
b 註3に同じ

8) 註7に同じ

9) 註3に同じ

参考文献

- ・日本の地質「関東地方」編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- ・録須紀夫『茨城県地学のガイド』コロナ社 1986年11月
- ・茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図(地名表編・地図編)』茨城県教育委員会 2001年3月
- ・谷田部の歴史編さん委員会『谷田部の歴史』谷田部町教育委員会 1975年9月
- ・中山信名『新編常陸国誌』崋書房 復刻版 1978年12月



第2図 古館明神脇遺跡調査区設定図（つくば市都市計画図2,500分の1）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

古館明神脇遺跡は、西谷田川右岸の標高20mの舌状台地の東部に立地している。遺構の配置や周囲の地形などから遺跡は北西側に広がると考えられる。今回の調査区は遺跡の南東部に位置しており、東西約120m、南北約140mほどである。調査面積は10,128㎡で、調査前の現況は畑地及び山林である。

調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡15軒と土坑2基、時期不明の土坑3基と溝跡1条を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に42箱出土している。主な遺物は、縄文土器(深鉢)、土師器(坏・椀・埴・高坏・壺・甕・甌・ミニチュア土器・手捏土器)、須恵器(坏・甌・甕)、土製品(土玉)、石器(鎌・紡錘車・砥石)、石製模造品(白玉・双孔円板)、金属製品(刀子・鎌・鎌・銭貨)などである。

第2節 基本層序

調査区南部の台地上の平坦面(D4Ⅱ区)にテストピットを設定し、地表面から2mほど掘り下げて基本土層の観察を行った(第3図)。土層は6層に分層でき、観察結果は以下のとおりである。

第1層は、黒褐色を呈する耕作土である。ロームブロックを少量含み、粘性は普通で、締まりは弱い。

第2層は、暗褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりはともに普通で、層厚は18～45cmである。

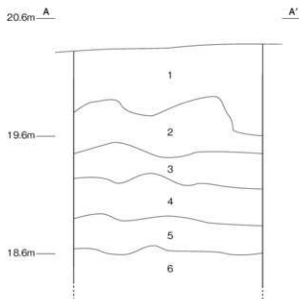
第3層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりはともに普通で、層厚は14～35cmである。

第4層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は29～40cmである。

第5層は、にぶい黄褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は23～36cmである。第I黒色帯に相当すると考えられる。

第6層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強い。確認した層厚は26～37cmであるが、下層は未掘のため不明である。

なお、遺構は第2層の上面で確認できた。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡15軒、土坑2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第1号住居跡（第4・5図）

位置 調査区北部のC5a1区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.23m、短軸5.88mの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は46～51cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められており、壁下には壁溝が巡っている。炭化材や焼土を広範囲で確認した。

炉 2か所。炉1は中央部の北寄りに付設されている。長径104cm、短径86cmの楕円形で、床面を12cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉2は中央部の南東寄りに付設されている。推定される長径は70cm、短径42cmの楕円形で、床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉1と炉2の新旧関係は不明である。

炉1土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量

炉2土層解説

- 1 濃い赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 3 褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

ピット 7か所。P1～P4は深さ34～40cmで、硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P5は深さ18cmで、南壁寄りの中央部に位置し、周辺が硬化していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ15cm・30cmで、いずれも性格不明である。

貯蔵穴 南壁際の中央部に位置している。長軸75cm、短軸58cmの隅丸長方形である。深さは52cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子少量 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

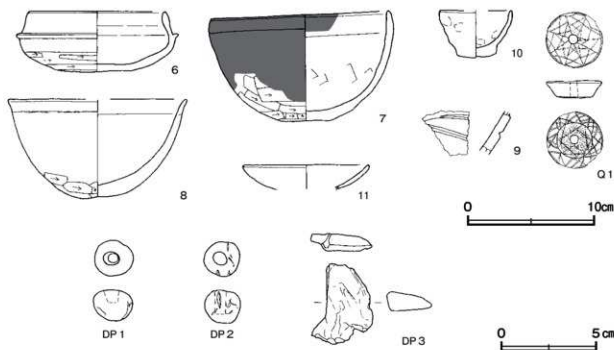
覆土 9層に層分けできる。上層にロームブロック、下層には炭化物や焼土が含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量 6 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
2 黒褐色 ロームブロック少量 7 暗褐色 焼土粒子中量、炭化物少量
3 褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 8 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 9 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色 炭化物・焼土粒子中量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片483点（坏297、椀2、器台1、高坏7、甕類173、ミニチュア土器3）、須恵器片6点（坏）、土製品3点（土玉2、不明1）、石器1点（紡錘車）が、北東部や貯蔵穴周辺の炭化材や焼土の下から出土している。そのほか、混入した縄文土器片1点（深鉢）が出土している。また、土器片の多くは細片で、後世の擾乱による影響を受けている。7は東壁溝から、6は南東部、8は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。また、1～5は貯蔵穴中層から下層にかけてまとまった状態で出土している。DP1・DP2は南西部の床面から出土している。Q1は西壁際の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。床面に炭化材が点在し、広範囲に焼土が広がっていること、遺物に二次焼成を受けているものがあることから焼失住居と考えられる。



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表(第4・5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
1	土師器	坏	14.1	6.0	3.3	長石・石英・ 雲母	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう割り 内面ナデ	約60% 覆土中層	95%	
2	土師器	坏	14.0	5.7	5.2	長石・石英・ 赤色粒子・組織	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 輪	約70% 覆土中層	95%	PL 9
3	土師器	坏	14.1	6.2	4.1	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう割り 後ナデ 内面へう巻き	約70% 覆土下層	70%	
4	土師器	坏	[168]	6.8	4.9	長石・石英	赤色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう割り 後ナデ 内面ナデ	約70% 覆土下層	30%	
5	土師器	坏	14.0	5.2	4.0	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう割り 後ナデ 内面ナデ	約60% 覆土中層	50%	
6	短壺器	坏	10.6	4.7	-	長石・石英・ 組織	灰	良好	口縁部・体部口縁ナデ	覆土下層	60%	PL 9
7	土師器	碗	14.0	8.6	3.8	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう割り 後ナデ 内面へうナデ	約85% 覆土中層	85%	PL 11
8	土師器	碗	[140]	7.2	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう割り 後ナデ 内面ナデ 輪	覆土下層	40%	
9	土師器	壺	-	(3.5)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	外面砥石軟用	覆土中	5%	
10	土師器	にぶい橙	[5.6]	3.7	3.1	長石	黒褐色	普通	外・内面ナデ 指刺痕	約60% 覆土中層	50%	
11	土師器	にぶい橙	9.8	(1.9)	-	長石・石英・ 赤色粒子	黒褐色	普通	外・内面ナデ	覆土中	10%	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 1	土玉	1.9~2.1	1.6	0.7~0.8	6.5	長石・石英	ナデ 未穿孔	床面	
DP 2	土玉	1.9	1.7	0.7	5.6	長石・石英	ナデ 未穿孔	床面	

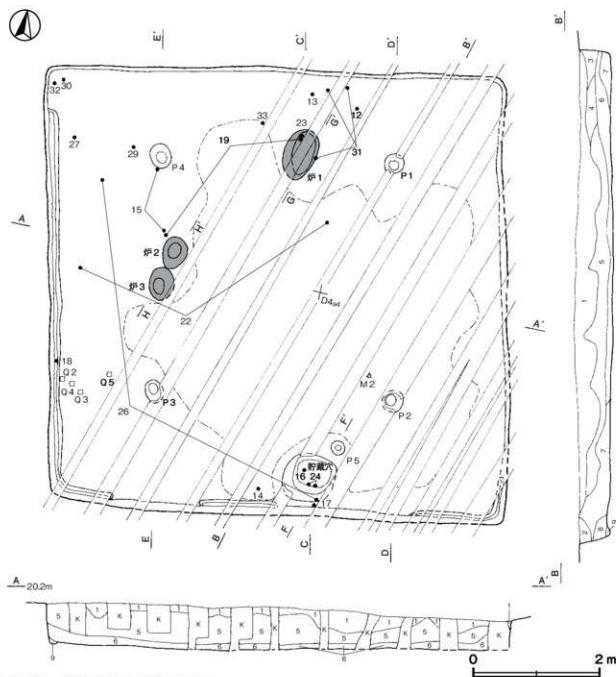
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 3	石製土器	4.2	3.2	0.9	9.3	長石・石英・ 赤色粒子	ナデ 指刺痕	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	紡錘車	4.4	1.4	0.6	(39.6)	滑石	全面に不規則な縦割 一方からの穿孔	覆土中層	PL 16

第2号住居跡（第6～11図）

位置 調査区北西部のC43区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

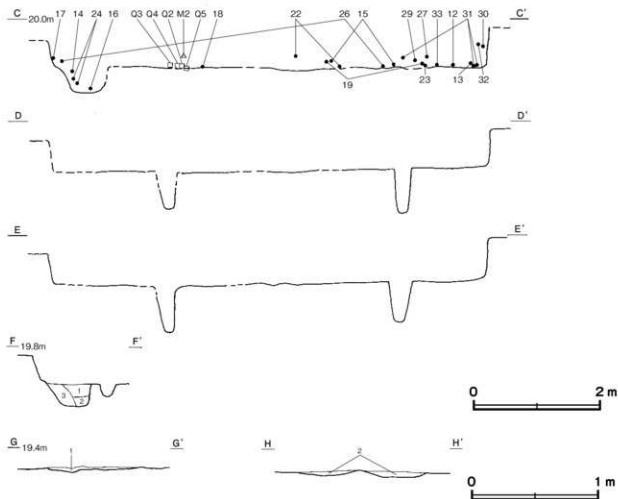
規模と形状 長軸7.25m、短軸7.02mの方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は45～64cmで、外傾して立ち上がっている。



第6図 第2号住居跡実測図(1)

床 平坦で、中央部が踏み固められている。南壁中央部及び南東コーナー部、西側壁及び南西コーナー部の壁下で壁溝を確認した。また、壁に沿って焼土や炭化材を確認した。

炉 3か所。炉1は中央部の北寄りに付設されている。長径83cm、短径48cmの楕円形で、床面を4cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉2は中央部の西寄りの北側に付設されている。長径53cm、短径39cmの楕円形で、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉3



第7図 第2号住居跡実測図(2)

は炉2の南側に付設されている。長径52cm、短径42cmの楕円形で、床面を3cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。それぞれの炉の新旧関係は不明である。

炉1～3土層解説

- 1 黒暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 2 濃い赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ58～77cmで、硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P5は深さ18cmで、南壁寄りの中央部に位置し、周辺が硬化していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南壁際の中央部に位置している。長軸84cm、短軸81cmの隅丸方形である。深さは39cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

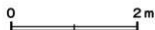
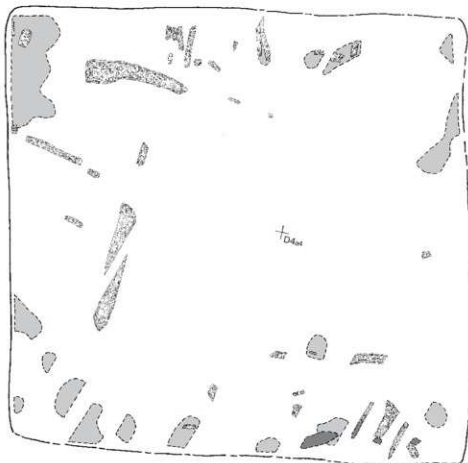
貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量 3 暗褐色 炭化物中量、ロームブロック少量
2 褐色 ロームブロック・炭化物中量

覆土 9層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

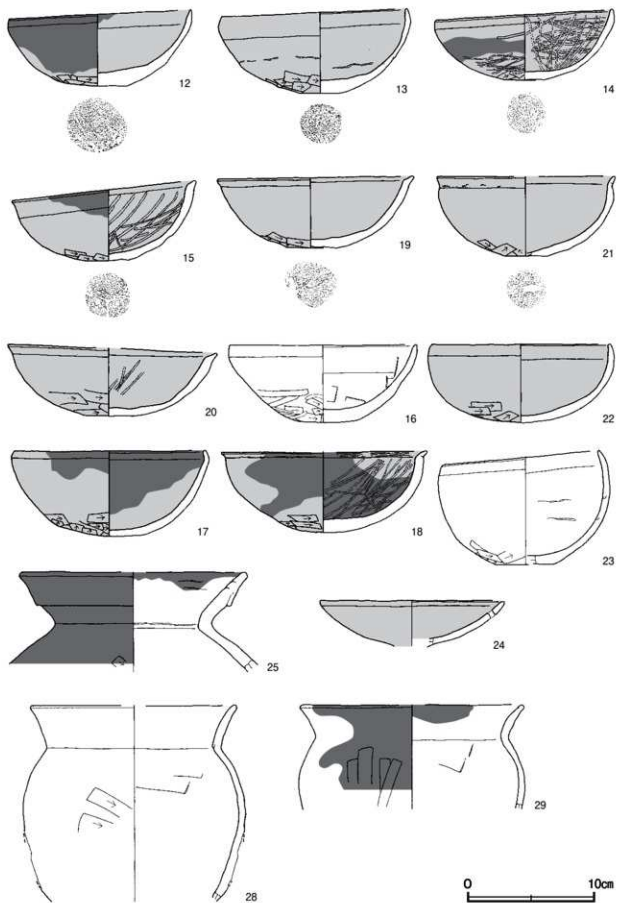
- 1 黒褐色 ロームブロック少量 6 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック少量 7 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 8 褐色 ロームブロック少量
4 黒色 ロームブロック少量 9 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 黒暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量



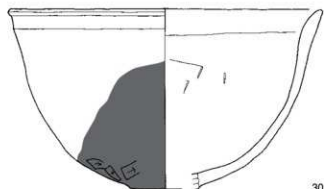
第8図 第2号住居跡実測図(3)

遺物出土状況 土師器片1047点(坏484, 椀1, 埴94, 高坏40, 甕類428), 須恵器2点(甕), 石器3点(紡錘車), 石製模造品1点(双孔円板), 鉄製品2点(鐵, 刀子カ), 滑石片3点が, 北西部の床面と貯藏穴周辺の覆土下層から床面にかけて出土している。そのほか, 混入した縄文土器片1点(深鉢)が出土している。また, 出土した土器片には細片も多く, 後世の攪乱による影響を受けている。12・13は完形で, 北壁際の床面から正位の状態出土している。14は貯藏穴西側, 33は北壁寄りの床面からそれぞれ出土している。23は炉1の底面から出土している。17は南壁際, 18は西壁際, 27・29は北西部の覆土下層からそれぞれ出土している。15・19は中央部北西寄りの覆土下層から, 22は中央部北東寄りと西壁側の覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。26は北西部と南壁際の覆土下層から出土した破片が接合したものである。31は北壁際の覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。30・32は北西コーナーの覆土中層から出土しており, 住居廃絶後に投棄されたものである。16・24は貯藏穴内から出土している。Q2~Q5は南西部の床面からまとめて出土している。M1は覆土中, M2は中央部南寄りの覆土中層からの出土である。

所見 時期は, 出土土器から5世紀中葉に比定できる。床面に炭化材が点在し焼土が広がっていること, 遺物に二次焼成を受けているものがあることから焼失住居と考えられる。



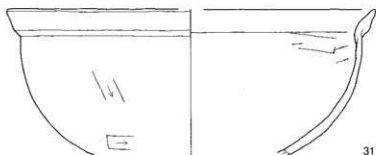
第9图 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



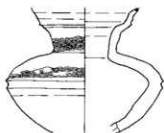
30



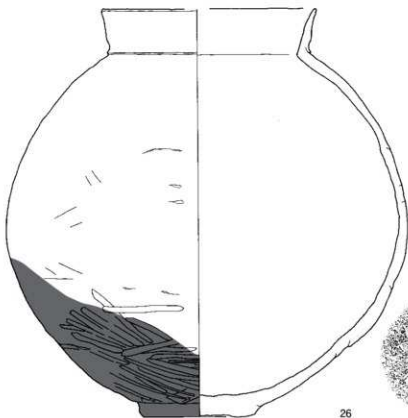
32



31



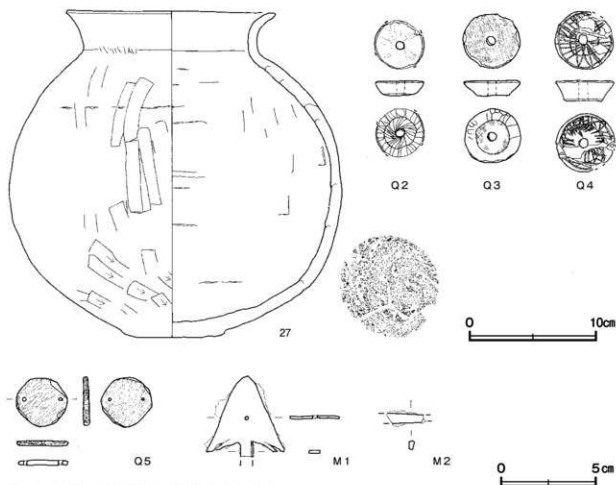
33



26



第10图 第2号住居跡出土遺物実測図(2)



第11図 第2号住居跡出土遺物実測図(3)

第2号住居跡出土遺物観察表(第9~11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
12	土師器	坏	144	6.0	4.8	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ	床面	外・内面縦行着 100% PL.9
13	土師器	坏	146	6.7	3.2	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ 輪横痕	床面	100% PL.9
14	土師器	坏	137	5.7	3.2	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ 輪横痕	床面	外面縦行着 95% PL.9
15	土師器	坏	145	6.3	3.3	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ	甕土下層	外面縦行着 90% PL.9
16	土師器	坏	148	6.1	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ 輪横痕	甕土下層	外・内面縦行着 70% 柱石
17	土師器	坏	150	6.37	-	長石・赤色粒子	赤	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ	甕土下層	外面縦行着 60%
18	土師器	坏	[162]	6.4	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ 輪横痕	床面	外・内面縦行着 60%
19	土師器	坏	153	5.6	3.9	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ	甕土下層	60%
20	土師器	坏	[165]	5.2	3.8	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ 輪横痕	甕土中	50%
21	土師器	坏	[140]	6.3	3.2	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ 輪横痕	甕土中	50%
22	土師器	坏	140	6.2	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ	甕土下層	75%
23	土師器	碗	123	9.0	4.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ 輪横痕	卍土底面	55% PL.12
24	土師器	高坏	146	(3.6)	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ 口縁部ナデの浮り	約高さ甕土下層	3%
25	土師器	甕	[178]	(7.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 輪横痕	甕土中	外・内面縦行着 10%
26	土師器	甕	[168]	32.1	8.8	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 輪横痕	甕土下層	外面縦行着 90% PL.14
27	土師器	甕	164	25.7	8.1	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ 輪横痕	甕土下層	60% PL.14
28	土師器	甕	[164]	(15.5)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ	甕土中	20%
29	土師器	甕	[174]	(8.2)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ	甕土下層	外・内面縦行着 30%
30	土師器	瓶*	246	14.2	(5.4)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ナデ 内面ナデ	甕土中層	外面縦行着 45%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
31	土師器	甌*	290]	(115)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	上縁部外・内面横ナ字・底部外周へテ割り痕ナ 高直ナ文字	覆土下層～	25%
32	須恵器	甌	-	(141)	-	長石	灰	良好	胎土1本有 焼成に黒斑ナ事 胎土 8本 以上より推定 胎土2本 の位置 須恵器ニ似テタタ 色等1枚多分胎土の平均等 胎土 割りに本有 焼成に黒斑ナ事 胎土 12本 以上より推定 胎土2本 の位置 須恵器ニ似テタタ 胎土 1枚ナリ 胎土2本の位置 胎土1本 有	覆土中層	30% PL12
33	須恵器	甌	-	(100)	-	長石	灰	良好	胎土1本有 焼成に黒斑ナ事 胎土 8本 以上より推定 胎土2本 の位置 須恵器ニ似テタタ 胎土 1枚ナリ 胎土2本の位置 胎土1本 有	床面	45% PL12

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴		出土位置	備考
Q 2	結縛車	3.8	1.2	0.7	(259)	滑石	底面に渦巻状の縦刻	側面に帯状の割り面	床面	PL16
Q 3	結縛車	4.5	1.2	0.7	(315)	滑石	底面に渦巻状の縦刻	側面に帯状の割り面	床面	
Q 4	結縛車	4.7	1.6	0.8	(388)	滑石	上面放射状の縦刻 側面2重円の縦刻 後周ナ縦刻	側面上下に2本の縦刻後不 規則ナ縦刻	床面	PL16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
Q 5	瓦孔板	26	26	0.3	3.7	滑石	全面研磨調整	孔径0.15～0.2cm 一方向からの穿孔	床面	PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
M 1	鏡	(4.2)	4.04	0.15	(6.4)	鉄	短頸3角鏡	断面平型 中央に0.15cmの透かし	覆土中	PL16
M 2	刀子*	(2.0)	(0.7)	0.3	(0.5)	鉄	葉の一部		覆土中層	

第3号住居跡 (第12～15図)

位置 調査区中央部西寄りのD4c5区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸7.28m、短軸7.17mの方形で、主軸方向はN-26°-Wである。壁高は44～58cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉の周りや出入り口ピット付近、南東部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。間仕切り溝が東壁側に2条、西壁側に3条確認され、長さ146～174cm、幅17～28cm、深さ9～11cmほどである。南西部を除いた壁際の床面に炭化材や焼土を確認した。また、南壁際の中央部に粘土塊を確認した。

炉 中央部の北寄りに付設されている。長径142cm、短径93cmの楕円形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は第4層上面で赤変硬化している。また、炉の西側に硬化した高まりを確認した。

炉土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------|----------|------------------|
| 1 極暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 | | |

ピット 8か所。P1～P6は深さ36～64cmで、規模や配置から主柱穴である。P7は深さ17cmで、南壁寄りの中央部に位置し、周辺が硬化していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P8は深さ24cmで、性格不明である。

貯蔵穴 北壁寄りの中央部に位置している。長径92cm、短径71cmの楕円形である。深さは46cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 炭化物中量、ロームブロック少量 | | |

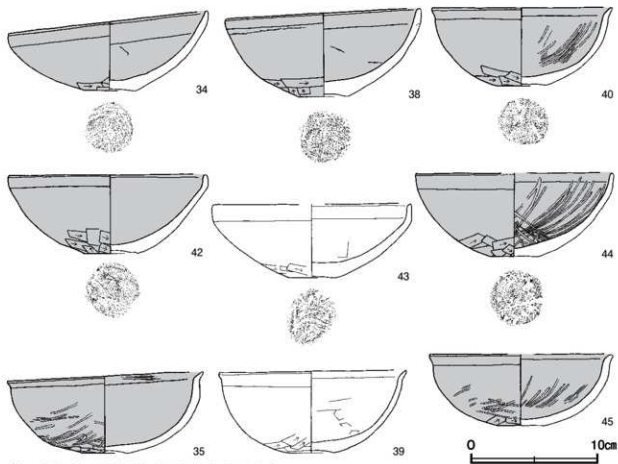
覆土 9層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

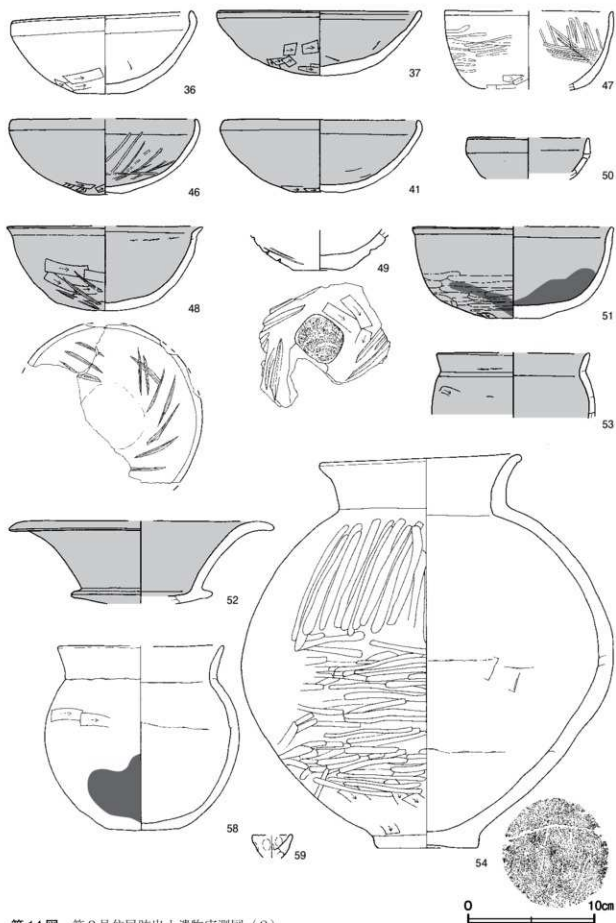
- | | | | |
|-------|------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 7 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 5 褐色 | ローム粒子中量 | | |

遺物出土状況 土師器片 2420 点 (坏 1450, 碗 1, 埴 179, 高坏 221, 甕類 566, 手握土器 3), 石器 1 点 (紡錘車), 石製模造品 15 点 (白玉 10, 双孔門板 5), 双孔門板未製品 2 点, 滑石片 9 点, 鉄製品 1 点 (鎌), 焼成粘土塊 1 点が, 床全面から炭化材や焼土に混じって出土している。出土した土器片には細片も多く, 後世の攪乱による影響を受けている。37 は北西部の床面から正位の状態出土しており, 36 が 37 に重なった状態で出土している。42 は北東部の床面から正位の状態出土しており, 41 が 42 に重なった状態で出土している。34・38・40・43・46・56 は, 貯蔵穴周辺の床面から出土している。45 は東壁際, 49・55 は南壁際, 51 は北西部, 52 は中央部, 35 は中央部西寄りの床面からそれぞれ出土している。53 は南西寄り, 58 は西壁側の床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。57 は北東部, 44 は南東部, 47 は西壁側の覆土下層からそれぞれ出土している。39・59 は貯蔵穴覆土下層, その上からは, 完形の 54 が横位の状態出土している。48 は貯蔵穴覆土中層から出土した破片が接合したものである。Q 6・Q 8・Q 13・Q 14 は南西部, Q 9・Q 10・Q 12・Q 15・Q 20 は南壁側の床面からそれぞれまともに出て出土している。Q 7・Q 18・Q 19 は北西部, Q 11 は西壁寄りの床面からそれぞれ出土している。Q 23 は東壁寄り, Q 17 は南壁寄り, Q 21 は南西部の覆土下層からそれぞれ出土している。M 3 は中央部南東寄りの床面から出土している。

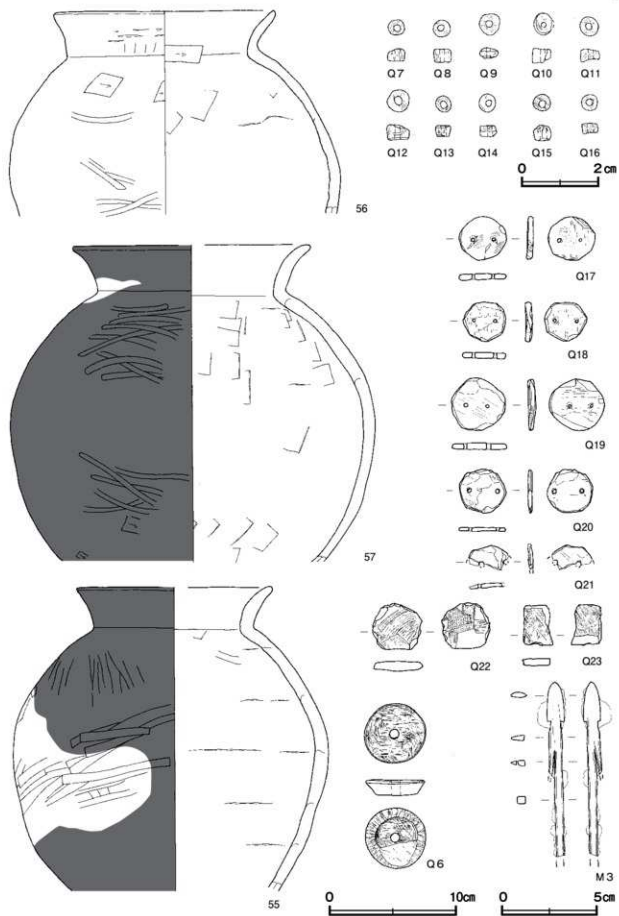
所見 時期は, 出土土器から 5 世紀中葉に比定できる。床面に炭化材や焼土塊が点在していることから焼失住居と考えられる。出土した土器の多くは, 床面か床面に近い覆土下層から出土しており, 廃絶後の間もない時期に投棄されたと考えられる。また, 炭化材や焼土塊の下から出土している土器もあり, 二次焼成を受けていることなどから, 土器が廃棄された後に意図的に焼却したと想定される。



第 13 図 第 3 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第14图 第3号住居跡出土物実測图(2)



第15图 第3号住居跡出土遺物実測図(3)

第3号住居跡出土遺物観察表(第13～15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
34	土師器	坏	15.6	6.4	4.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	床面	100% PL11
35	土師器	坏	15.4	6.4	3.4	長石・石英・赤色粒子	赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	床面	100% PL11
36	土師器	坏	14.2	6.5	3.4	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	床面 (P.37上)	95% PL10
37	土師器	坏	16.0	5.1	-	長石・石英・赤母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	床面	90% PL11
38	土師器	坏	15.4	7.0	4.0	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	床面	90%
39	土師器	坏	14.8	6.5	3.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	貯蔵穴 覆土下層	80% PL10
40	土師器	坏	14.1	6.2	3.8	長石・石英	赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	床面	75% PL10
41	土師器	坏	15.4	5.7	3.8	長石・赤色粒子	赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	床面 (P.42上)	70% PL11
42	土師器	坏	15.5	6.2	4.2	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	床面	60%
43	土師器	坏	[15.6]	5.8	3.6	長石・石英・赤母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	床面	60%
44	土師器	坏	[15.4]	6.6	3.5	長石・石英・赤色粒子	赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	覆土下層	60%
45	土師器	坏	[14.4]	5.6	3.6	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	床面	50%
46	土師器	坏	[14.6]	5.9	[3.0]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	床面	40%
47	土師器	坏	[13.2]	(6.2)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	覆土下層	20%
48	土師器	坏	[15.4]	6.6	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面へうりナデ 底部へうり	貯蔵穴 覆土中層	結構破 50%
49	土師器	坏	-	(3.2)	3.9	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へうり後ナデ 内面ナデ 底部へうり	覆土中層	結構破 25%
50	土師器	坏 <small>9</small>	[9.4]	(3.3)	-	長石・石英	赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 穿孔	覆土中	5%
51	土師器	碗	[15.8]	7.2	4.1	長石・石英・赤母	にぶい赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面ナデ 底部へうり	床面	外・内面破目重 50%
52	土師器	高坏	[21.0]	(6.5)	-	長石・石英・赤色粒子	赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 全面丁寧ナデ	床面	10%
53	土師器	壺	[11.8]	(5.1)	-	長石・石英	赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後ナデ 内面ナデ 輪軸痕	床面	5%
54	土師器	甕	15.5	31.1	7.9	長石・石英・赤母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面下段へうり後 後継段のヘラナデ 体部外面上段位置のヘラナデ 内面へうりナデ 輪軸痕	貯蔵穴 覆土中層	100% PL14
55	土師器	甕	[15.4]	(23.9)	-	長石・石英	明赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面中段へうり後 体部外面上段位置のヘラナデ 体部外面へうり後継段のヘラナデ 内面へうりナデ 輪軸痕	床面	外面破目付 70%
56	土師器	甕	17.2	16.1	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後へうりナデ 内面へうりナデ 輪軸痕	床面	30%
57	土師器	甕	[18.6]	(25.0)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後継段のヘラナデ 内面へうりナデ 輪軸痕	覆土下層	外面破目付重 30%
58	土師器	小形甕	[12.8]	14.6	5.5	長石・石英・赤母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へうり後へうりナデ 内面へうりナデ 輪軸痕	床面	外面破目付重 30%
59	土師器	手捏土器	[3.0]	(1.8)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	全面ナデ 指頭痕	貯蔵穴 覆土下層	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 6	粘土	4.8	1.3	0.8	37.7	滑石	両面に押痕 側面に縦位の痕り痕	床面	PL16
Q 7	白玉	0.4	0.3	0.2	0.09	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 8	白玉	0.4	0.4	0.2	0.13	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 9	白玉	0.6	0.2	0.3	0.13	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 10	白玉	0.6	0.1	0.4	0.18	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 11	白玉	0.5	0.2	0.4	0.11	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 12	白玉	0.6	0.2	0.4	0.23	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 13	白玉	0.5	0.2	0.3	0.09	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 14	白玉	0.5	0.2	0.3	0.13	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 15	白玉	0.5	0.2	0.4	0.14	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 16	白玉	0.4	0.2	0.2	0.08	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	覆土中	PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 17	瓦孔内板	2.3	2.5	0.4	3.72	滑石	全面研削調整 孔径0.15～0.2cm 一方からの穿孔	覆土下層	PL15
Q 18	瓦孔内板	2.1	2.2	0.4	3.28	滑石	全面研削調整 孔径0.15～0.25cm 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 19	瓦孔内板	2.7	2.9	0.4	5.55	滑石	全面研削調整 孔径0.15～0.3cm 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 20	瓦孔内板	(2.3)	2.5	0.2	(2.64)	滑石	全面研削調整 孔径0.15～0.2cm 一方からの穿孔	床面	PL15
Q 23	瓦孔内板	(1.4)	(2.2)	0.3	(1.08)	滑石	全面研削調整 孔径0.25cm 一方からの穿孔	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 22	瓦片板 土製品	24	26	0.5	5.0	滑石	両面一部研磨調整	覆土中	PL15
Q 23	瓦片板 土製品	24	1.6	0.4	1.82	滑石	研磨調整	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 3	鏃	(9.24)	0.74	0.28	(7.7)	鉄	長距離 鎌身部片刃	床面	PL16

第4号住居跡 (第16・17図)

位置 調査区南部のD5g3区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.90m、短軸6.12mの長方形で、主軸方向はN-26'-Wである。壁高は22～32cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

炉 5か所。炉1は中央部の北寄りに付設されている。長径46cm、短径38cmの楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉2は中央部に付設されている。長径46cm、短径43cmの円形で、床面と同じ高さの地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉3は中央部西側に付設されている。長径75cm、短径73cmの円形で、床面と同じ高さの地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉4は炉2の南側に付設されている。長径39cm、短径34cmの円形で、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉5は炉4の東側に付設されている。長径43cm、短径39cmの円形で、床面と同じ高さの地床炉である。炉床面はわずかに赤変硬化している。それぞれの炉の新旧関係は不明である。

炉1土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量 2 赤褐色 焼土ブロック中量

炉2土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子微量 2 赤褐色 焼土ブロック多量

炉3土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量 2 極暗褐色 焼土粒子微量

炉4土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量 2 赤褐色 ローム粒子多量

炉5土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量

ピット 5か所。P1～P3は深さ16～26cmで、硬化面の広がりや配置から主柱穴である。P4は深さ14cmで、南壁寄りの中央部に位置し、周辺が硬化していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5は深さ17cmで、性格不明である。

貯蔵穴 南東部に位置している。長軸98cm、短軸78cmの隅丸長方形である。深さは39cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

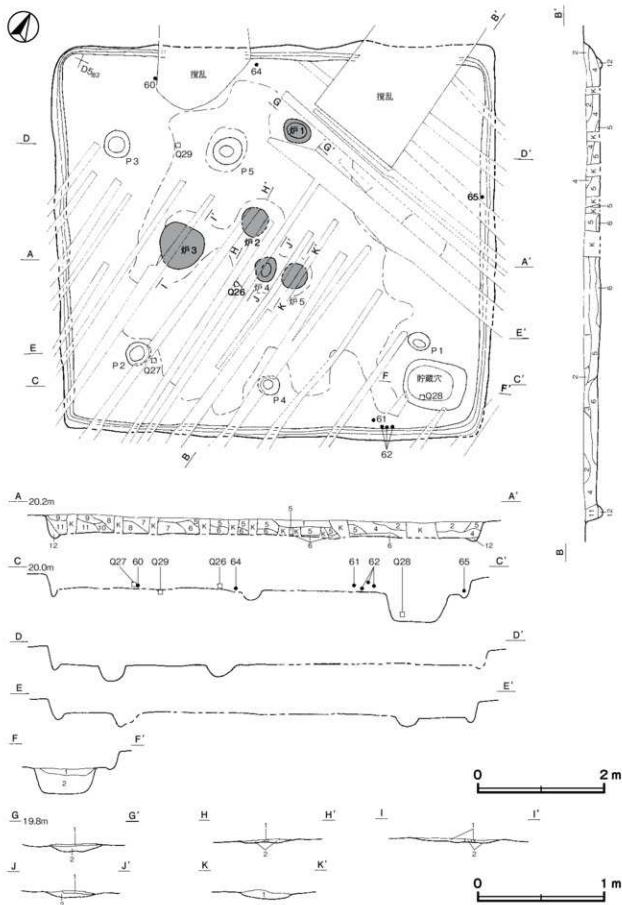
貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 2 褐色 ローム粒子中量

覆土 12層に分層できる。ロームブロックを含む層が多く、不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

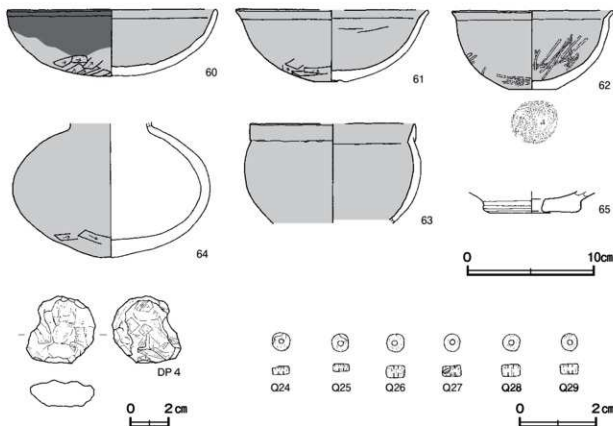
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量 7 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 極暗褐色 ロームブロック中量 8 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子中量 9 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック中量、 10 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
5 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 11 褐色 ロームブロック中量
6 極暗褐色 ローム粒子中量 12 褐色 ロームブロック少量



第16图 第4号住居跡実測图

遺物出土状況 土師器片 1362 点 (坏 301, 椀 7, 埴 77, 高坏 9, 甕型 968), 石製模造品 6 点 (白玉, 滑石片 11 点, 焼成粘土塊 4 点が, 北東部や南東部の覆土下層から集中して出土している。そのほか, 混入した縄文土器片 2 点 (深鉢) が出土している。また, 土器片には細片も多く, 後世の擾乱による影響を受けている。60・64 は北壁際, 65 は東壁際, 61・62 は南壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。Q 26 は中央部, Q 27 は南西部, Q 29 は北西部の覆土下層からそれぞれ出土している。Q 28 は貯蔵穴内からの出土である。
所見 時期は, 出土土器から 5 世紀中葉に比定できる。



第 17 図 第 4 号住居跡出土遺物実測図

第 4 号住居跡出土遺物観察表 (第 17 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
60	土師器	坏	166	5.3	-	長石・石英・赤鉄・細砂	にぶい褐	普通	口縁部外・内面積ナデ 内面厚風調整不明	体部外面へう張り残ナデ	覆土下層	外面探行着 100%
61	土師器	坏	[15.1]	5.7	2.4	長石・石英・赤鉄・細砂	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面積ナデ 内面へう張り	体部外面へう張り残ナデ	覆土下層	40%
62	土師器	碗	126	6.2	3.6	長石・石英・赤鉄・細砂	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面積ナデ 内面へう張り	体部外面へう張り残ナデ	覆土下層	60%
63	土師器	碗	[130]	(7.8)	-	長石・石英・赤鉄・細砂	赤褐	普通	口縁部外・内面積ナデ	外・内面丁寧ナデ	覆土中	15%
64	土師器	埴	-	(10.6)	-	長石・石英・赤鉄・細砂	赤褐	普通	体部外面下層へう張り 内面厚風調整不明	体部外面丁寧ナデ	覆土下層	80%
65	土師器	瓶	-	(1.7)	[66]	長石・石英・赤鉄・細砂	橙	普通	底部へう張り残ナデ		覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 4	不明形状	3.5	3.7	1.4	15.3	長石・石英・赤鉄・細砂	ナデ 指頭痕 縦横貫の圧痕	覆土中	

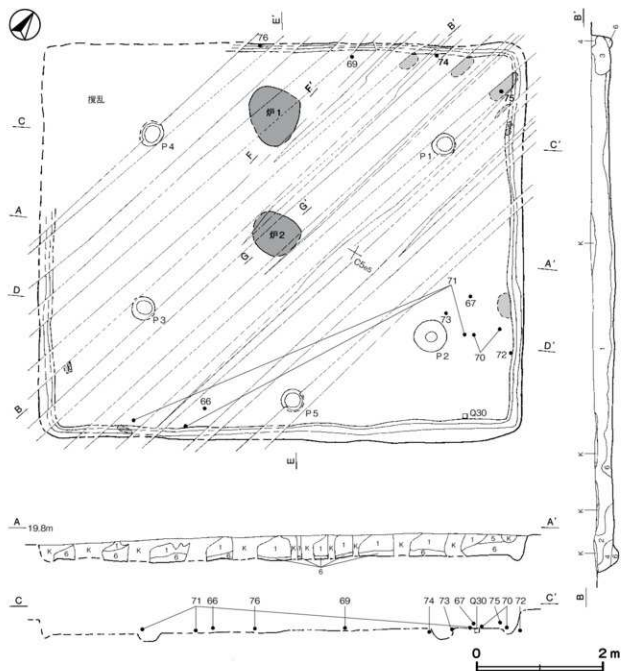
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 24	白玉	0.5	0.2	0.2	0.09	滑石	両面平滑 円筒状 一方向からの穿孔	覆土中	PL15
Q 25	白玉	0.5	0.2	0.1	0.09	滑石	両面平滑 円筒状 一方向からの穿孔	覆土中	PL15
Q 26	白玉	0.5	0.3	0.2	0.38	滑石	両面平滑 円筒状 一方向からの穿孔	覆土下層	PL15

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 27	白玉	0.5	0.3	0.2	0.10	滑石	両面平滑 円筒状 一方向からの穿孔	覆土下層	PL15
Q 28	白玉	0.5	0.3	0.2	0.12	滑石	両面平滑 円筒状 一方向からの穿孔	貯蔵穴 覆土下層	PL15
Q 29	白玉	0.5	0.3	0.1	0.11	滑石	両面平滑 円筒状 一方向からの穿孔	覆土下層	PL15

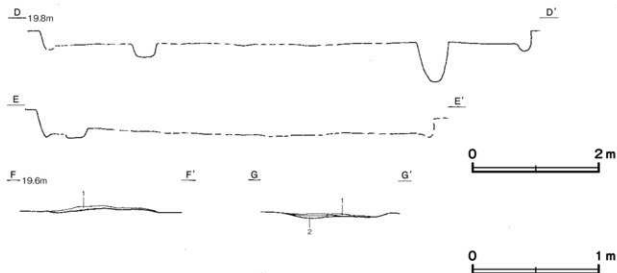
第5号住居跡 (第18～21図)

位置 調査区北東部のC5e4区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸7.62m、短軸6.22mの長方形で、主軸方向はN-27°-Wである。壁高は22～34cmで、外傾して立ち上がっている。



第18図 第5号住居跡実測図(1)



第19図 第5号住居跡実測図(2)

床 平坦である。硬化面は確認できなかった。壁下には壁溝が巡っており、北東部や南西部の壁際に焼土や炭化材を確認した。

炉 2か所。炉1は中央部の北寄りに付設されている。長径98cm、短径79cmの楕円形で、床面と同じ高さの地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉2は中央部に付設されている。推定される長径は78cm、短径65cmの楕円形で、床面と同じ高さの地床炉である。炉床面は赤変硬化している。

炉1・2土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ12～61cmで、規模や配置から支柱穴である。P5は深さ12cmで、南壁寄りの中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

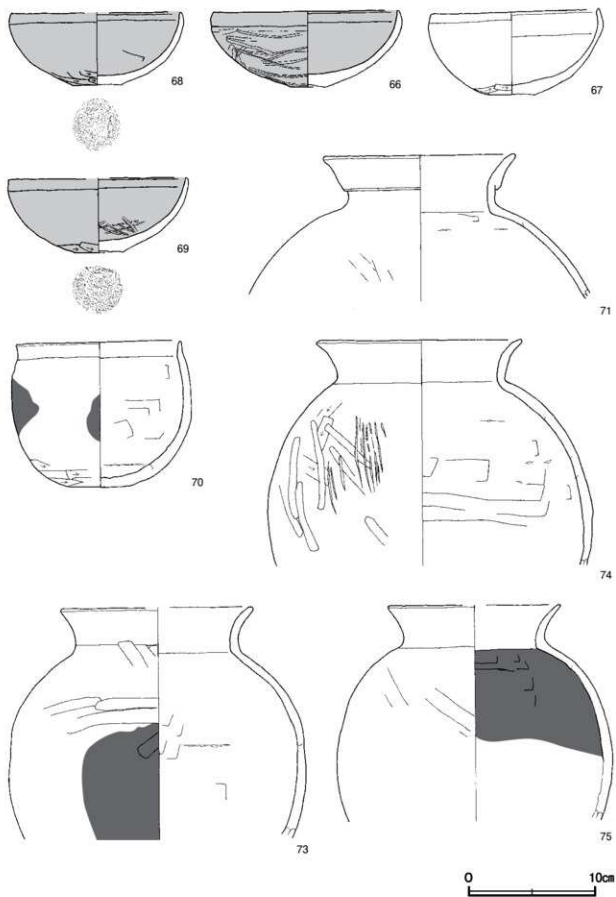
覆土 6層に分層できる。多くの層にロームブロックや焼土や炭化物が含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

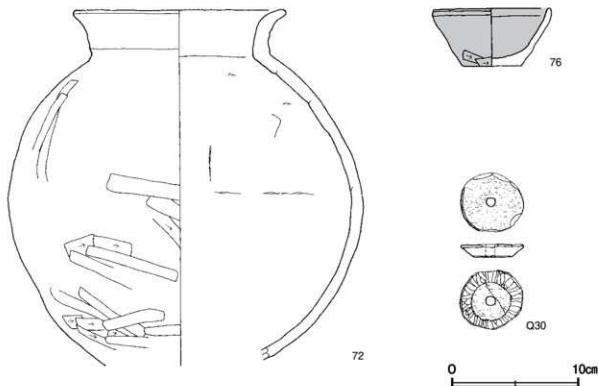
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
3 赤褐色 焼土粒子中量、ロームブロック微量 6 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片727点(坏49, 椀1, 埴16, 高坏3, 甕類657, ミニチュア土器1), 石器1点(紡錘車), 滑石片2点が、北東部や南東部、南西部付近の覆土下層から床面にかけてまとまって出土している。また、出土した土器片には細片も多く、後世の攪乱による影響を受けている。72は南東部の東壁際の床面から横位でつぶれた状態で出土している。70・73は南東部、74は北東部の床面からそれぞれ出土している。69・76は北壁際、75は北東部、67は南東部寄り、66は南壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。71は南東部寄りの床面と南壁際、南西部寄りの覆土下層から出土した破片が接合したものである。Q30は南東部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。炭化材や焼土は、床面よりわずかに高い位置で確認されており、まとまって出土している土器とともに埋め戻しの過程で投げ込まれたものとする。



第20图 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



第21図 第5号住居跡出土遺物実測図(2)

第5号住居跡出土遺物観察表(第20・21図)

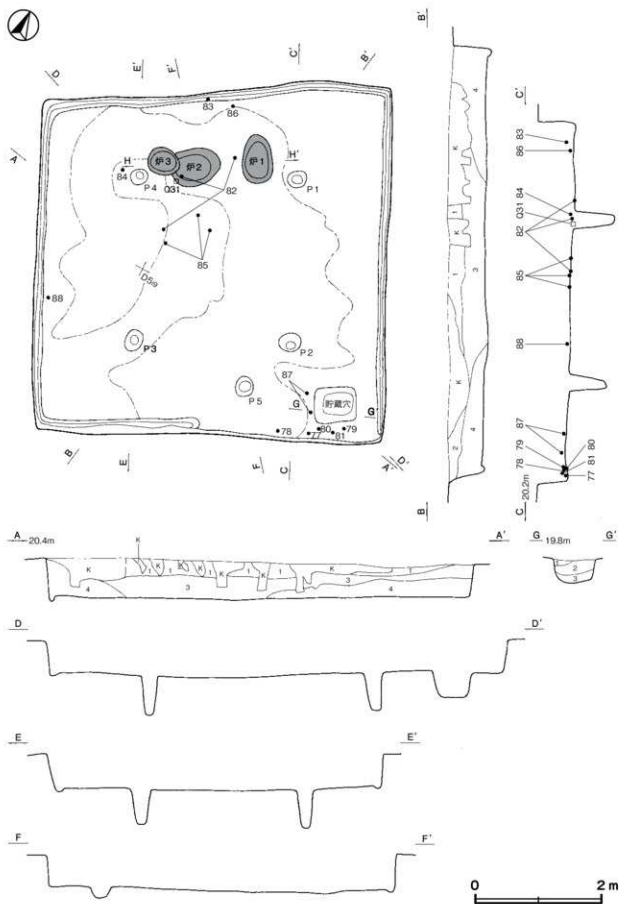
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
66	土師器	坏	144	6.0	26	長石・石英・赤色粒子	赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデラナデ	体部外面へラ割り後へラナデ	覆土下層	85% PL10
67	土師器	坏	133	6.7	32	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へラ割り後ナデ	覆土下層	85% PL10
68	土師器	坏	[133]	5.7	36	長石・石英・赤色粒子	赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へラ割り後ナデ	覆土中	60%
69	土師器	坏	[140]	5.9	37	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部内面へラ割り後ナデ	覆土下層	40%
70	土師器	碗	129	11.4	46	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へラ割り後ナデ	覆土下層	外周保存者 80% PL12
71	土師器	壺	150	[11.5]	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へラ割り後へラナデ	覆土下層	10%
72	土師器	甕	163	(27.5)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へラ割り後ナデ	床面	90%
73	土師器	甕	[150]	[18.2]	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へラ割り後へラナデ	床面	外周保存者 30%
74	土師器	甕	159	(17.8)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へラ割り後へラナデ	床面	継ぎ直し 30%
75	土師器	[134]	[17.1]	-	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へラ割り後へラナデ	覆土下層	内周保存者 20%	
76	土師器	にぶい橙	9.1	4.5	4.5	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へラ割り後ナデ	覆土下層	70% PL 9

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q30	紡錘形	5.0	1.1	0.8	(36.4)	滑石	両面に捺痕 側面に縦位の割り痕	床面	PL16

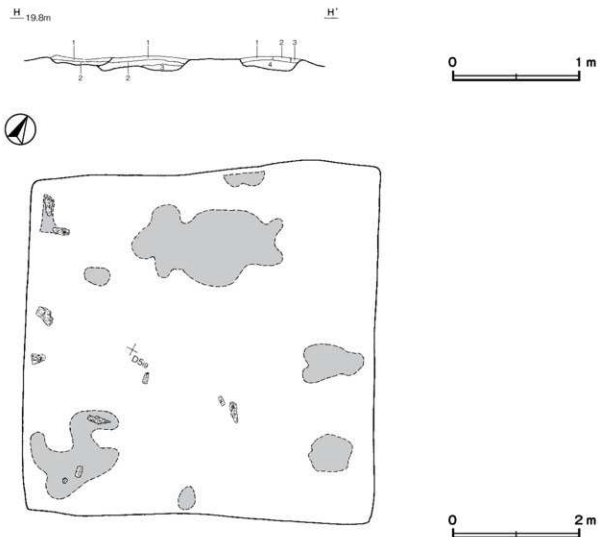
第6号住居跡(第22～26図)

位置 調査区南東部のD5h9区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.54m、短軸5.40mの方形で、主軸方向はN-27°-Wである。壁高は52～60cmで、外傾して立ち上がっている。



第22图 第6号住居跡実测图(1)



第23図 第6号住居跡実測図(2)

床 平坦で、中央部が踏み固められている。南壁の一部を除いた壁下には壁溝が巡っており、炉の周辺や東部・南西部を中心に焼土や炭化材を確認した。

炉 3か所。炉1は中央部の北寄り、P1付近に付設されている。長径76cm、短径49cmの楕円形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉2は中央部北寄りに付設され、炉3に掘り込まれている。長径78cm、短径58cmの楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉3は中央部北寄りのP4付近に付設され、炉2を掘り込んでいる。長径50cm、短径45cmの円形で、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。土層断面から、炉2から炉3へ作り替えたと考えられる。炉1と炉2・3の新旧関係は不明である。

炉1土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------------|--------|-----------------------|
| 1 極暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |

炉2土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 2 赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

炉3土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|----------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック微量 | 2 に近い赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
|-------|------------------|----------|-------------------------|

ピット 5か所。P1～P4は深さ56～66cmで、規模や配置から支柱穴である。P5は深さ19cmで、南壁寄りの中央部に位置し、周辺が硬化していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東部に位置している。長軸67cm、短径56cmの長方形である。深さは42cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | | |

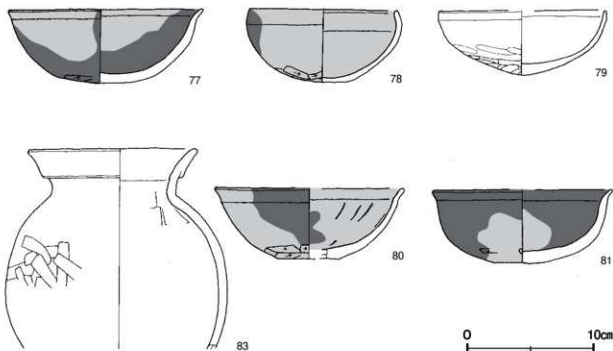
覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックや焼土や炭化物が含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

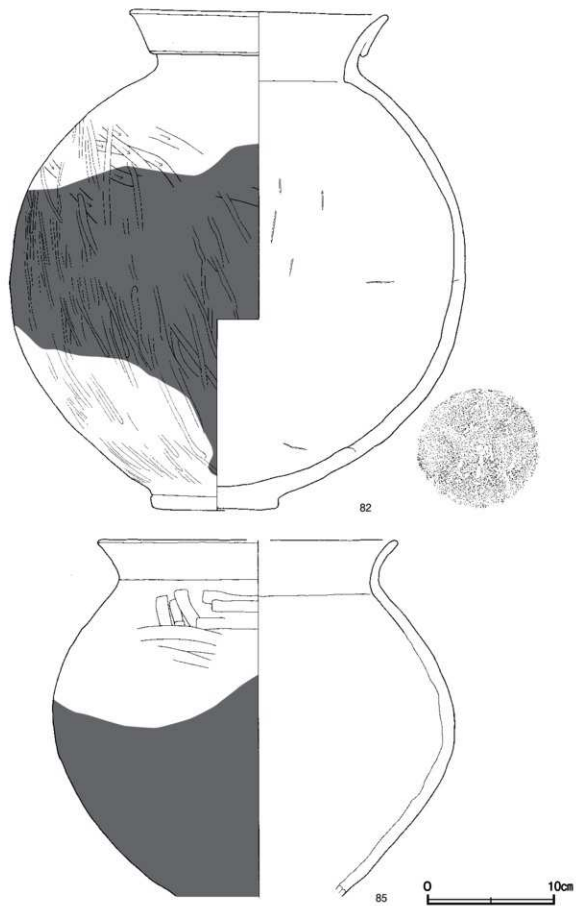
- | | | | |
|-------|----------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片677点(坏225, 埴21, 高坏13, 甕類417, ミニチュア土器1), 石製模造品1点(白玉), 滑石片2点, 焼成粘土塊4点が、北西側の覆土下層から床面にかけてまともに出て出土している。また、貯蔵穴周辺の覆土下層からもまともに出て出土している。そのほか、混入した縄文土器片11点(深鉢)が出土している。出土した土器片には細片も多く、後世の攪乱による影響を受けている。84は北西部, 86は北壁際, 88は西壁際の床面からそれぞれ出土している。82・85は炉の周辺や中央部の床面から出土した破片が接合したものである。77～81・87は貯蔵穴周辺の覆土下層からまともに出て出土している。83は北壁際の覆土下層から出土している。Q31は炉2の南側の床面から出土している。

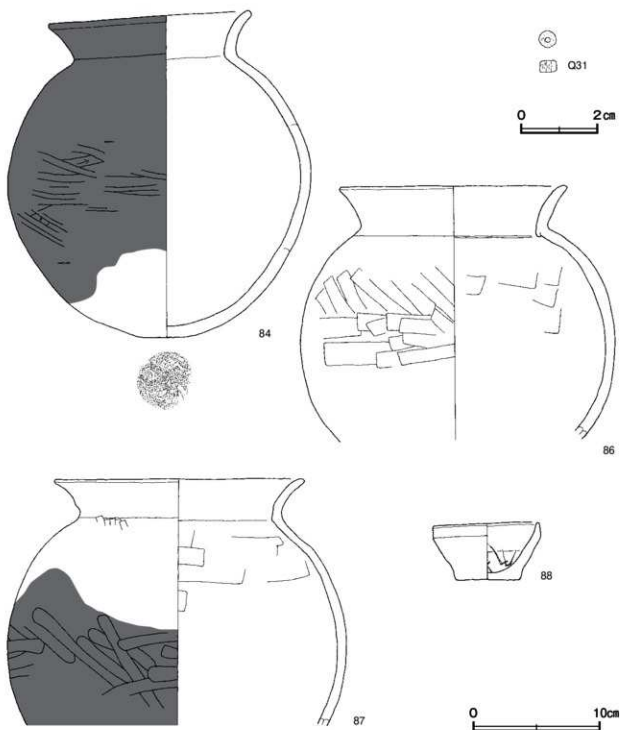
所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。床面に炭化物の塊や焼土が点在していること、遺物に二次焼成を受けているものがあることから焼失住居と考えられる。北西側の床面から出土した壺や甕はつぶれた状態で出土しており、土器片の散在している状況から北西部から投棄されたと考えられる。



第24図 第6号住居跡出土遺物実測図(1)



第25图 第6号住居跡出土遺物実測図(2)



第26図 第6号住居跡出土遺物実測図(3)

第6号住居跡出土遺物観察表(第24~26図)

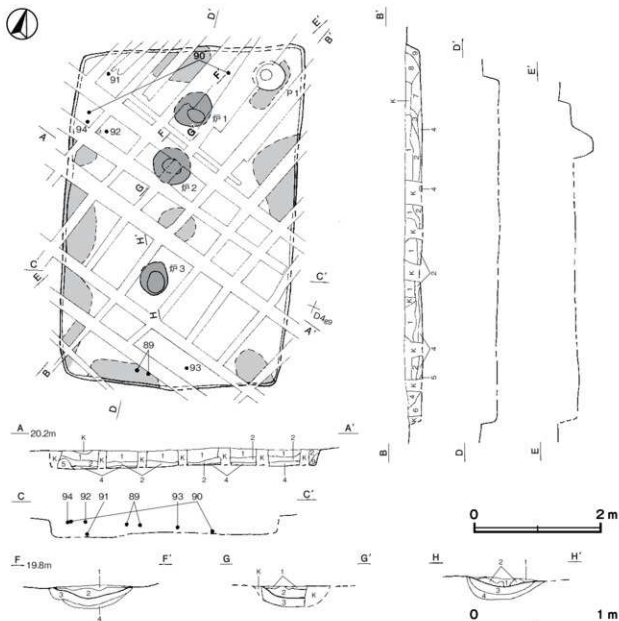
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
77	土師器	坏	154	6.0	2.8	長石・石英・ 赤鉄	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ 底部へラ削り	体部外面へラ削り横ナ デ	覆土下層	外・内面露出率 75% P4.11
78	土師器	坏	115	5.7	3.8	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ 底部へラ削り	体部外面へラ削り横ナ デ 底部へラ削り	覆土下層	外・内面露出率 56% P4.9
79	土師器	坏	[131]	5.1	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ ナデ	体部外面へラ削り横 ナデ	覆土下層	55%
80	土師器	坏	[148]	5.6	[4.6]	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ 底部へラ削り	体部外面へラ削り横ナ デ 底部へラ削り	覆土下層	外・内面露出率 40%
81	土師器	坏	[140]	5.8	4.0	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ナデ 底部へラ削り	体部外面へラ削り横ナ デ 底部へラ削り	覆土下層	外・内面露出率 35%
82	土師器	壺	200	20.5	9.8	長石・石英・ 赤鉄・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ ナデ	体部外面へラ削り横 ナデ	床面	外・内面露出率 70% P4.14
83	土師器	壺	130	(15.7)	-	長石・石英・ 赤鉄	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ ナデ	体部外面へラ削り横 ナデ	覆土下層	60%

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
84	土師器	甕	15.6	25.8	4.2	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後横 糸のヘラナデ 内面横糸 産物不明 輪切肌	床面	外面保存 60% PL13
85	土師器	甕	[23.3]	[28.1]	-	長石・石英・ 雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位斜位のヘラ ナデ後横糸のヘラナデ 体部外面下位及び内 面穿通溝彫り	床面	外面保存 70%
86	土師器	甕	17.6	[20.0]	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面中位へう張り 後横糸のヘラナデ 体部 外面上位斜位のヘラナ デ 内面ヘラナデ	床面	60%
87	土師器	甕	19.3	[19.4]	-	長石・石英・ 雲母	にぶい赤黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り後ヘ ラナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	外面保存 50%
88	土師器	じこたつ 甕	8.3	4.5	5.0	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 内面ヘ ラナデ 底部へう張り後 ナデ	床面	95% PL 9

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q31	白玉	0.5	0.3	0.2	0.12	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	床面	PL15

第7号住居跡 (第27・28図)

位置 調査区南西部のD4B区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。



第27図 第7号住居跡実測図

規模と形状 長軸 5.36 m、短軸 3.66 m の長方形で、長軸方向は $N-20^{\circ}-W$ である。壁高は 20～31 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 平坦であるが、硬化面は確認できなかった。壁際や中央部で焼土を確認した。

炉 3か所。炉1は中央部の北寄りに付設されている。長径 65 cm、短径は推定 53 cm の楕円形で、床面を 11 cm ほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は第3層上面で赤変硬化している。炉2は、炉1の南側に付設されている。長径 63 cm、短径は推定 55 cm の楕円形で、床面を 9 cm ほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は第3層上面で赤変硬化している。炉3は、中央部に付設されている。長径 53 cm、短径 46 cm の楕円形で、床面を 7 cm ほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は第3層上面で赤変硬化している。それぞれの新旧関係は不明である。

炉1～3土層解説

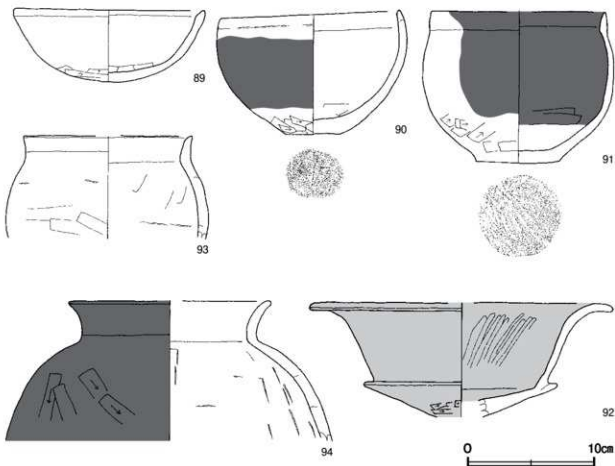
- | | |
|-------------------------------------|-------------------------|
| 1 赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒
子微量 | 3 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 2 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 |

ピット 北東部に位置している。深さ 31 cm で、性格不明である。

覆土 9層に分層できる。ロームブロックや焼土が含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 6 にぶい褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 | 7 橙褐色 焼土ブロック中量 |
| 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 8 褐色 ロームブロック少量 |
| 4 にぶい橙褐色 焼土ブロック中量 | 9 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| 5 褐色 ロームブロック中量 | |



第28図 第7号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 480点（坏76、碗2、増7、高坏2、甕類393）、が、北・南・西の各壁側の覆土中層から下層にかけて出土している。そのほか、混入した縄文土器片2点（深鉢）が出土している。また、出土した土器片には細片も多く、後世の攪乱による影響を受けている。93は南壁際、91は北西部の覆土下層から出土している。89は南壁際の覆土中層から出土している。92・94は北西部の覆土上層から出土している。90は北東部と北西部の覆土上層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。炭化材は確認されていないが、壁際や中央部から焼土が確認されていることから焼失住居の可能性がある。土器片は焼土の上から出土しており、焼却後に投棄されたと考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
89	土師器	坏	150	5.7	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラナデ	覆土中層	80% PL10
90	土師器	碗	141	9.8	4.2	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り横ナデ 内面ヘラナデ 輪横痕	覆土上層～下層	外面保存者 95% PL12
91	土師器	碗	[138]	12.0	6.6	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り横ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	外・内面保存者 50%
92	土師器	高坏	[244]	(9.1)	-	長石・石英	明赤褐	普通	外口縁部外・内面横ナデ 外口縁部外・内面横ナデ 外口縁部外・内面横ナデ 外口縁部外・内面横ナデ 外口縁部外・内面横ナデ	覆土上層	30%
93	土師器	甕	[132]	(8.1)	-	長石・石英・赤粒	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り横ナデ 内面ヘラナデ 輪横痕	覆土下層	20%
94	土師器	甕	[158]	(11.0)	-	長石・石英・赤粒	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り横ナデ 内面ヘラナデ 輪横痕	覆土上層	外面保存者 20%

第8号住居跡（第29～32図）

位置 調査区北西部のC4a5区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.48m、短軸3.24mの方形で、長軸方向はN-70°-Wである。壁高は38～45cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部の東寄りに付設されている。長径68cm、短径46cmの不整形円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた地床である。炉床面は赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 2 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量

ピット 南東部に位置している。深さ25cmで、性格不明である。

貯蔵穴 南西部に位置している。長径60cm、短径55cmの円形である。深さは32cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

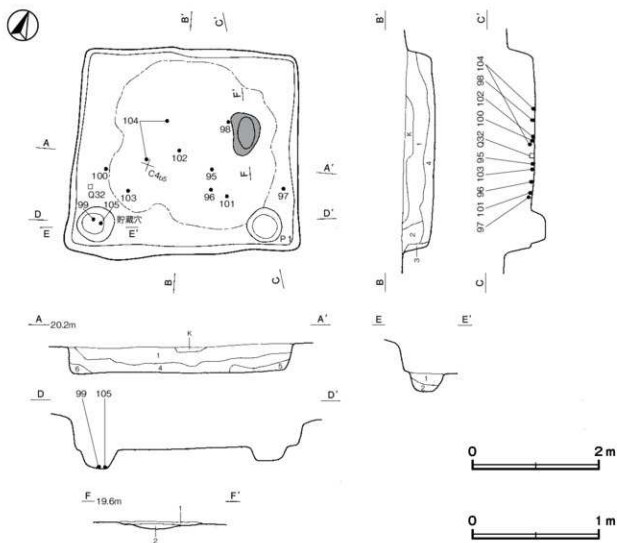
貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 2 明褐色 ロームブロック少量

覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

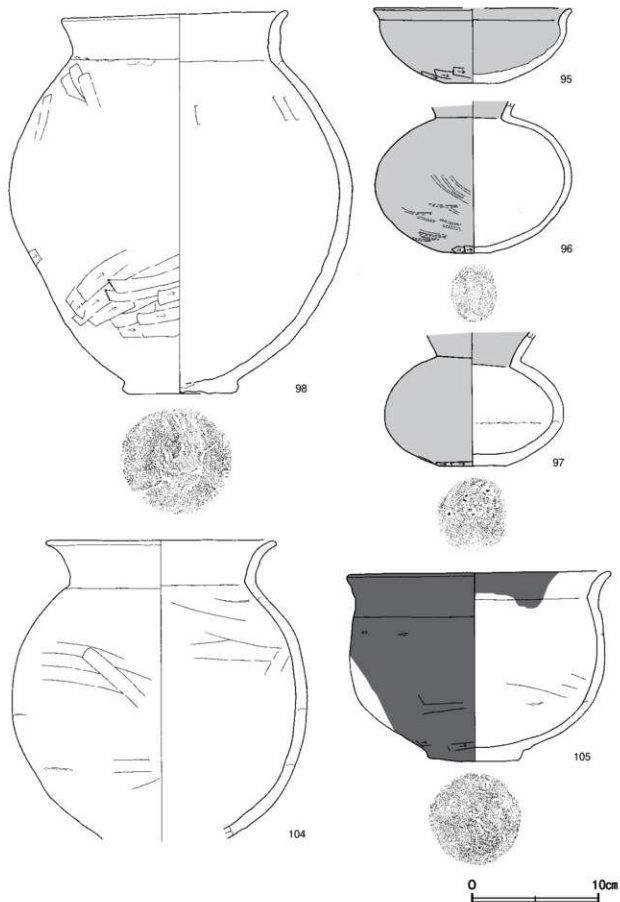
- 1 黒色 ロームブロック・炭化粒子少量 4 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 5 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 6 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量



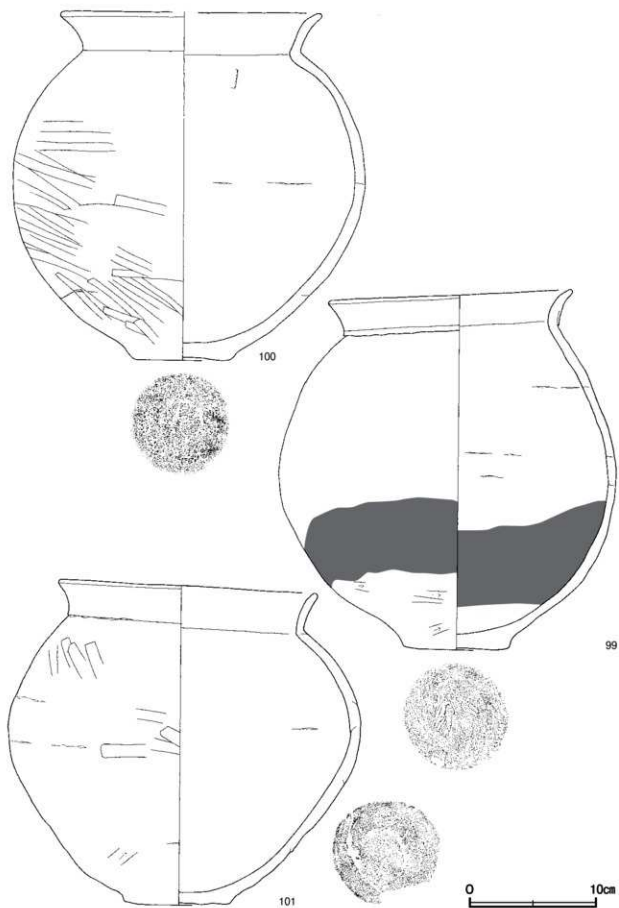
第29図 第8号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片132点(坏3, 埴11, 甕類118), 石器1点(紡錘車)が出土している。95は破片の状態で中央部の床面から出土している。96は正位で, 102は横位で中央部の床面からそれぞれ出土している。100は横位で, 103は口縁部を下にした斜位で西部の床面からそれぞれ出土している。104は中央部の覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。99・105は貯蔵穴の底面から横位で重なり, つぶれた状態で出土している。98は炉の西側, 101は南東部の覆土下層からまとまって出土した破片がそれぞれ接合したものである。97は東壁際の覆土下層から横位で出土している。Q32は西部の床面から出土している。

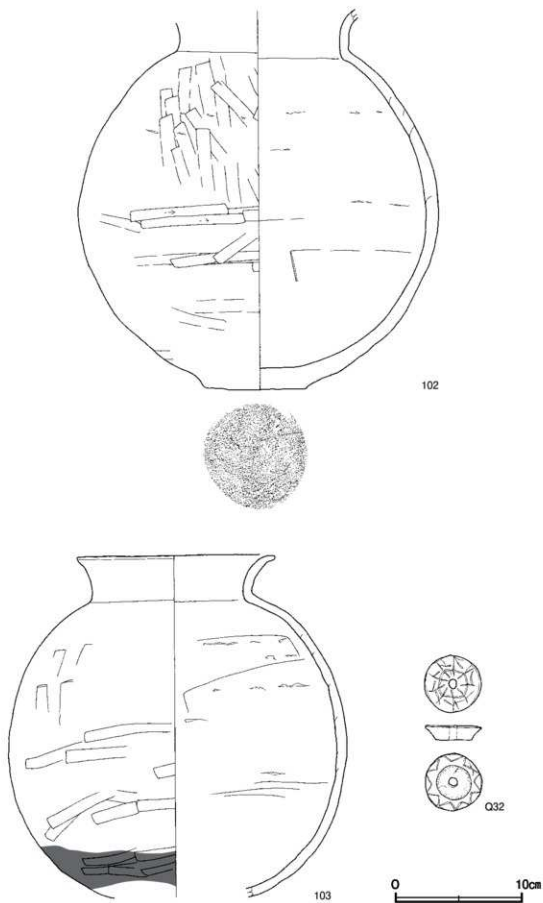
所見 時期は, 出土土器から5世紀中葉に比定できる。8個体の甕が出土しており, 完存率が高いこと, 出土状況は横位や斜位が多く, 口縁部を中央部に向けていることなどから, 覆土第4~6層が埋め戻される過程で投棄されたと考えられる。



第30图 第8号住居跡出土遺物実測図(1)



第31图 第8号住居跡出土遺物実測図(2)



第32图 第8号住居跡出土遺物実測図(3)

第8号住居跡出土遺物観察表(第30～32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
95	土師器	坏	[156]	5.9	4.4	長石・石英・赤色粒子	に濃い褐色	普通	口縁部外・内面横ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 内面調整不明	床面	40%
96	土師器	埴	—	(120)	2.8	長石・石英・赤色粒子	に濃い褐色	普通	体部内面へうり後ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 内面調整不明	床面	80%
97	土師器	埴	—	(106)	5.6	長石・石英・赤色粒子	赤褐色	普通	体部外面へうり後ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 内面調整不明	覆土下層	80%
98	土師器	甕	17.5	30.3	8.2	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 内面調整不明	覆土下層	75% PL13
99	土師器	甕	19.0	28.4	8.4	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 内面調整不明	貯蔵穴底面	内・内面保存率 90%
100	土師器	甕	[204]	27.4	7.6	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 内面調整不明	床面	80% PL13
101	土師器	甕	20.2	25.6	8.4	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 内面調整不明	覆土下層	60% PL14
102	土師器	甕	—	(30.0)	8.0	長石・石英	に濃い褐色	普通	口縁部外・内面横ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 内面調整不明	床面	80%
103	土師器	甕	15.3	(27.0)	—	長石・石英・赤色粒子	に濃い褐色	普通	口縁部外・内面横ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 内面調整不明	床面	外面保存率 90% PL13
104	土師器	甕	17.5	(23.6)	—	長石・石英・赤色粒子	に濃い褐色	普通	口縁部外・内面横ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 内面調整不明	覆土下層	65%
105	土師器	甕	20.4	15.0	7.2	長石・石英・赤色粒子	に濃い褐色	普通	口縁部外・内面横ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 体部外面へうり後ナナダ 内面調整不明	貯蔵穴底面	内・内面保存率 95% PL13

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 32	紡錘車	4.5	1.2	0.7	31.8	滑石	上面同心円状の縦線放射状の縦溝 放射状の縦線間に短い縦溝 側面V字状の縦溝 底面に凹凸模様	床面	PL16

第9号住居跡(第33・34図)

位置 調査区南東部のE5c9区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南東部が調査区域外へ延びているが、長軸7.50m、短軸7.22mの方形で、主軸方向はN-23°-Wである。壁高は46～54cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。西壁の一部を除いて壁下には壁溝が巡っている。北壁際や南西部で焼土を確認した。南東部は調査区域外であるため確認できなかった。

炉 3か所。炉1は中央部の北寄りに付設されている。長径85cm、短径48cmの楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は第3層上面で赤変硬化している。炉2は炉1の南側に付設されている。長径48cm、短径40cmの楕円形で、床面を4cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は第3層上面で赤変硬化している。炉3は中央部のやや西寄りに付設されている。長径35cm、短径33cmの円形で、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。それぞれの炉の新旧関係は不明である。

炉1～3土層解説

- | | | | |
|------|---------------|--------|-----------------------|
| 1 褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 褐色 | 焼土粒子中量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ51～67cmで、規模や配置から主柱穴である。P5は深さ14cmで、南壁寄りの中央部に位置していることから出入り施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

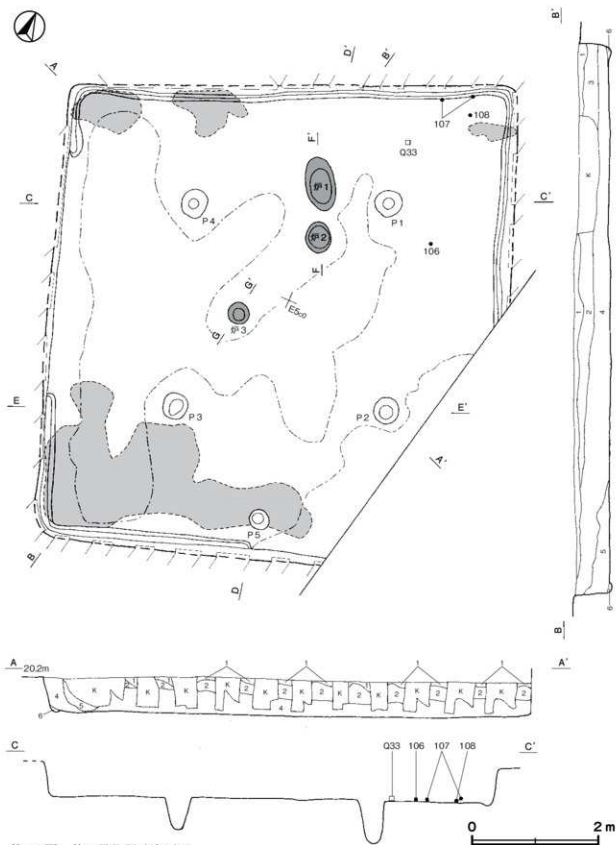
土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子微量 |

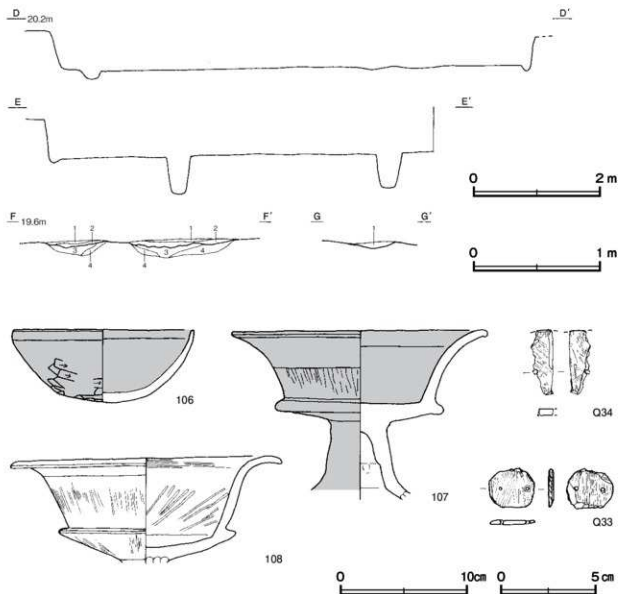
遺物出土状況 土師器片233点(坏107, 埴2, 高坏17, 甕類107), 石製模造品2点(双孔円板), 滑石片1点, 焼成粘土塊1点が出土している。そのほか、混入した縄文土器片5点(深鉢)が出土している。また、出土した土器片には細片も多く、後世の擾乱による影響を受けている。106・108は北東部の床面からそれぞれ出土している。107は北東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。Q33は北東部の覆土下層か

ら出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。焼土は床面よりわずかに高い位置で確認されており、埋め戻しの過程で土器とともに投棄されたと考えられる。



第33図 第9号住居跡実測図



第34図 第9号住居跡・出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表(第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
106	土師器	杯	14.2	5.8	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面へテ張り後ナテ 内面ナテ	床面	65%
107	土師器	高杯	19.8	(13.4)	-	長石・石英	赤	普通	口縁部外・内面横ナテ 外面及び脚部外面へテナテ後ナテ 内面ナテ 脚部内面指張糸	覆土下層	60% PL12
108	土師器	高杯	21.6	(8.6)	-	長石・石英	赤褐	普通	口縁部外面横ナテ 口縁部内面横位のへり着き 外面縦位のへり着き 内面斜位のへり着き	床面	45% PL12

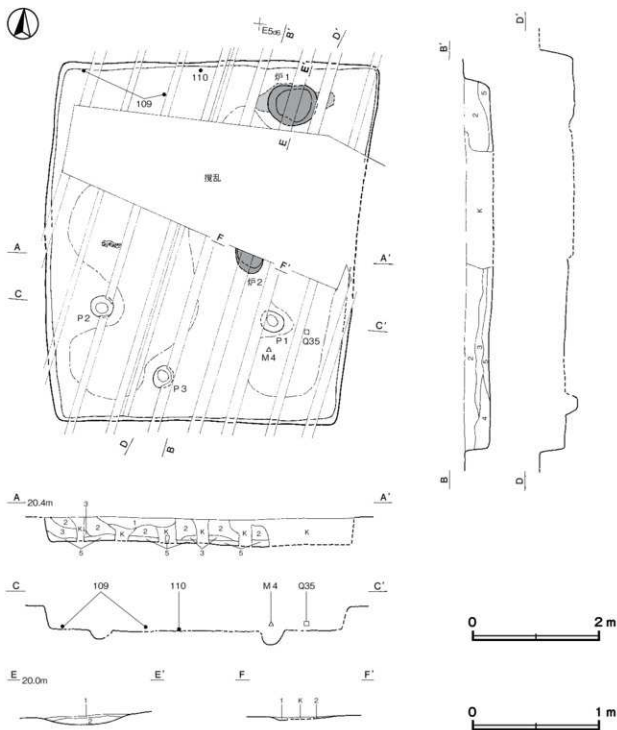
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q33	瓦孔円板	2.0	2.4	0.25	2.02	滑石	全面研磨調整 孔径0.13~0.15cm 一方向からの穿孔	覆土下層	PL15
Q34	瓦孔円板	(3.4)	(1.15)	0.35	(2.3)	滑石	研磨調整 孔径0.15cm 一方向からの穿孔	覆土中	

第10号住居跡 (第35・36図)

位置 調査区南東部のE5d5区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.65m、短軸5.08mの長方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は36~52cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、柱穴や炉の周りが踏み固められている。西壁側で炭化材を確認した。



第35図 第10号住居跡実測図

炉 2か所。炉1は北東部に付設されている。長径は推定78cm、短径62cmの楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉2は中央部の東寄りに付設されている。北部に攪乱を受けているため、長径は49cmで、短径は23cmしか確認できなかった。床面をわずかに掘りくぼめた地床炉で、炉床面は赤変硬化している。それぞれの炉の新旧関係は不明である。

炉1土層解説

- 1 明赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量

炉2土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量 2 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量

ピット 3か所。P1・P2は、深さ24・15cmで、規模や配置から支柱穴である。P3は、深さ21cmで、南壁寄りに位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

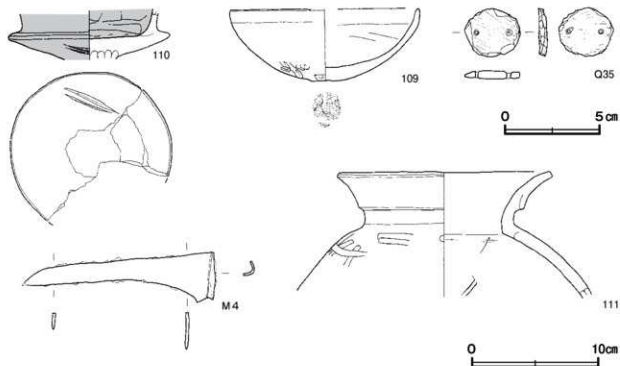
覆土 5層に分層できる。各層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片240点(坏12, 高坏16, 甕類212)、石製模造品1点(双孔円板)、鉄製品2点(鎌1, 不明1)、滑石片1点が出土している。また、出土した土器片には細片も多く、後世の攪乱による影響を受けている。110は北壁際の床面から出土している。109は北西部と北壁側の覆土下層から出土した破片が接合したものである。Q35, M4は南東部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。炭化材は床面よりわずかに高い位置で確認されており、埋め戻しの過程で土器とともに投棄されたと考えられる。



第36図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表 (第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
109	土師器	坏	[148]	5.7	2.2	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 内面ヘラナデ	体部外面へうすり残ナ	覆土下層	40%
110	土師器	高坏	-	(39)	-	長石・石英	明赤陶	普通	坏部外面ナデ 内面磨頭によるナデ	輪横痕	床面	埋骨痕 15%
111	土師器	甕	166	(100)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ ナデ 内面ヘラナデ	体部外面へうすり残ヘ 輪横痕	覆土中	20%

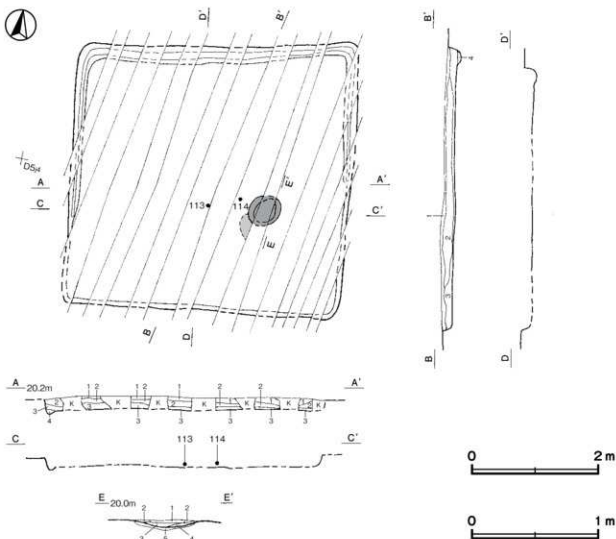
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 35	瓦孔内瓦	26	29	0.4	5.75	滑石	全面縦磨調整 孔径0.2-0.25cm 一方向からの穿孔	覆土下層	PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 4	鎌	(152)	3.9	0.2	(341)	鉄	端部全面折り返し	覆土下層	PL16

第11号住居跡 (第37・38図)

位置 調査区南東部のD54区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.45m、短軸4.15mの方形で、長軸方向はN-81°-Eである。壁高は14-17cmで、外傾して立ち上がっている。



第37図 第11号住居跡実測図

床 平坦であるが、硬化面は確認できなかった。北側半分の壁下には壁溝が巡っている。炉の南西側で焼土を確認した。

炉 中央部の南東寄りに付設されている。長径54cm、短径47cmの楕円形で、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は第5層上面で赤変硬化している。

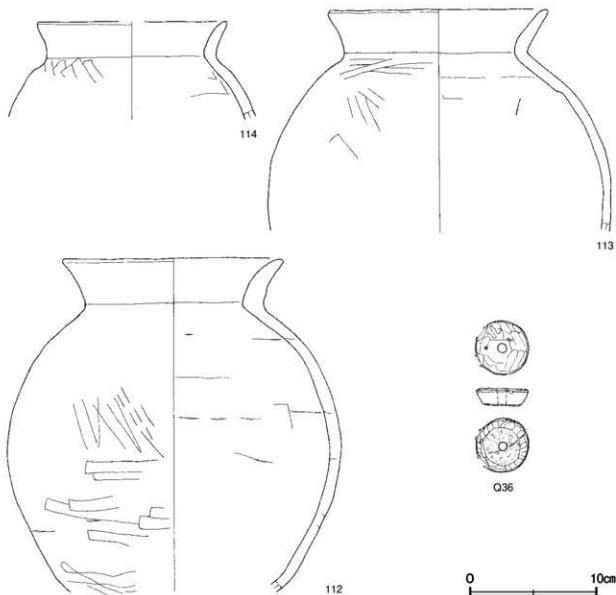
炉土層解説

- | | |
|------------------------|-------------------------------|
| 1 赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子微量 | 4 にぶい褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 明赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量 | |

覆土 4層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 3 にぶい褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 4 にぶい褐色 ロームブロック微量 |



第38図 第11号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 496 点 (坏 24, 埴 20, 高坏 11, 甕類 441), 石器 1 点 (紡錘車), 滑石片 1 点が, 中央部及び北東部の覆土下層から出土している。また, 出土した土器片には細片も多く, 後世の攪乱による影響を受けている。113・114 は, それぞれ中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は, 出土土器から 5 世紀中葉に比定できる。焼土は床面よりわずかに高い位置で確認されており, 埋め戻しの過程で土器とともに投棄されたと考えられる。

第 11 号住居跡出土遺物観察表 (第 38 図)

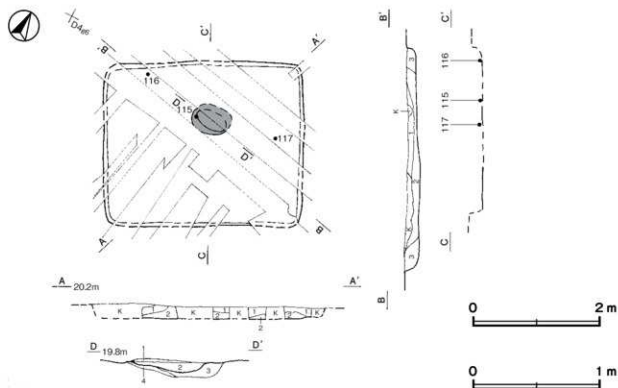
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
112	土師器	甕	17.2	(26.2)	-	長石・石英・雲母	灰黄期	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上位割位のヘラナデ 体部外面下位横位のヘラナデ 内面へラナデ	覆土中	40%
113	土師器	甕	17.0	(17.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	覆土下層	30%
114	土師器	甕	[14.6]	(7.7)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	覆土下層	15%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 36	紡錘車	4.2	1.4	0.7	(37.3)	滑石	側面に縦位の削り痕 底面に渦巻き状の捺痕	覆土中	PL16

第 12 号住居跡 (第 39・40 図)

位置 調査区南西部の D 4 g6 区, 標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 3.15 m, 短軸 2.67 m の長方形で, 長軸方向は N-68°-E である。壁高は 17~22 cm で, 外傾して立ち上がっている。



第 39 図 第 12 号住居跡実測図

床 平坦であるが、硬化面は確認できなかった。

炉 中央部北寄りに付設されている。北部に攪乱を受けているため、長径は63cmで、短径は24cmしか確認できなかった。床面を9cmほど掘りくぼめた地床炉で、炉床面は第3層上面で赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
 2 赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量
 3 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

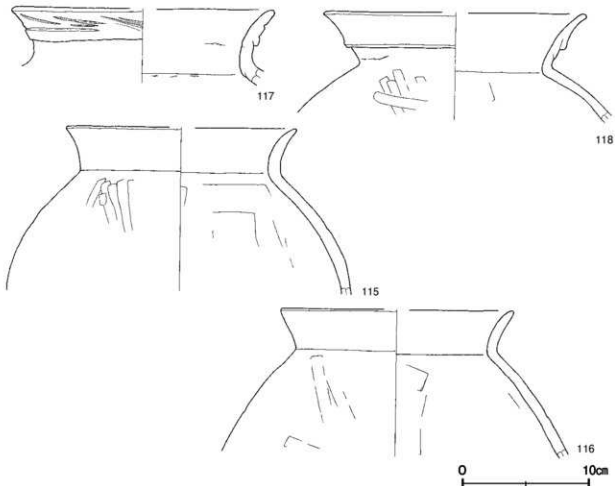
覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
 2 暗褐色 ロームブロック中量
 3 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片739点(坏42, 埴3, 高坏2, 甕類692)が、南東部を除いた範囲の覆土下層から床面にかけて出土している。また、出土した土器片には細片も多く、後世の攪乱による影響を受けている。115は中央部北寄り, 117は東壁側, 116は北西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。出土状況から、土器は第3層が埋め戻されるのと同時に投棄されたと考えられる。



第40図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表 (第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
115	土師器	甕	[179]	(129)	-	辰石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラナデ	内	覆土下層 20%

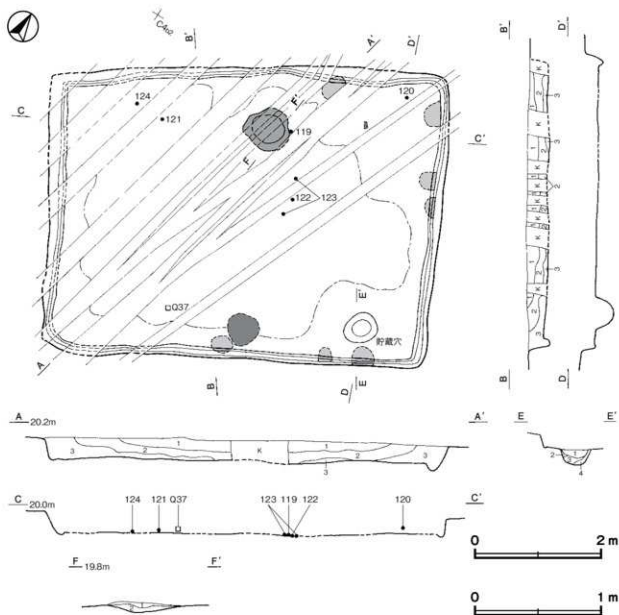
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
116	土師器	甕	[182]	(11.6)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	覆土下層	10%
117	土師器	甕	[202]	(5.9)	-	長石・石英	にがい黄緑	普通	口縁部外・内面横ナデ 輪横痕	覆土下層	研ぎ痕 10%
118	土師器	甕	[204]	(8.6)	-	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ 輪横痕	覆土中	5%

第13号住居跡 (第41～43図)

位置 調査区北西部のC4b2区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.21m、短軸4.57mの長方形で、長軸方向はN-58'-Eである。壁高は21～34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が通っており、北東部や南東壁際に炭化材や焼土、粘土塊を確認した。



第41図 第13号住居跡実測図

炉 中央部北寄りに付設されている。長径71cm、短径は推定65cmの楕円形で、床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量

貯蔵穴 南東部に位置している。長径53cm、短径45cmの楕円形である。深さは25cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物微量
2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 4 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

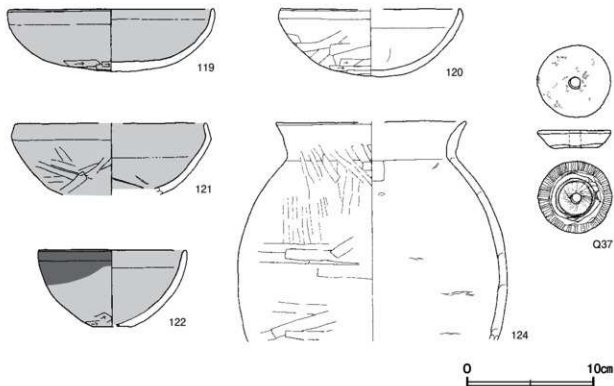
覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックや焼土ブロック、炭化物が含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

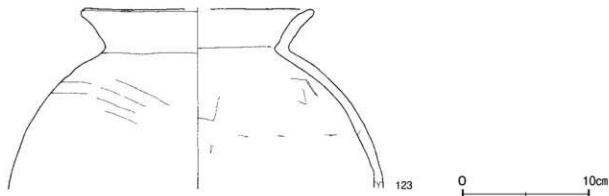
- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片247点(坏44, 碗1, 埴4, 高坏13, 甕類185), 石器1点(紡錘車), 焼成粘土塊1点が出土している。また、出土した土器片には細片も多く、後世の攪乱による影響を受けている。119は炉の東側, 122は中央部の床面からそれぞれ出土している。123は中央部の床面から出土した破片が接合したものである。121・124は西部の覆土下層から出土している。120は北部の覆土中層から出土している。Q37は南部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。壁際の床面に炭化材や焼土が確認されたことから焼失住居と考えられる。出土状況から、土器は第3層が埋め戻されると同時に投棄されたと考えられる。



第42図 第13号住居跡出土遺物実測図(1)



第43図 第13号住居跡出土遺物実測図(2)

第13号住居跡出土遺物観察表(第42・43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
119	土師器	坏	160	49	-	長石・石英・ 赤母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面摩風調整不明	体部外面へう張り後ナデ	床面	55%
120	土師器	坏	[142]	54	-	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ ラナデ・内面ヘラナデ	体部外面へう張り後へ	覆土中層	30%
121	土師器	坏	[150]	(5.6)	-	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外・内面ヘラナデ	覆土下層	30%
122	土師器	碗	11.6	6.1	[3.0]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面差成調整不明	体部外面へう張り後ナデ	床面	外面掘行着 40%
123	土師器	甕	[178]	(14.2)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 輪横面	体部外・内面ヘラナデ	床面	20%
124	土師器	甕	[148]	(17.3)	-	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ ラナデ・体部外面上位斜位のヘラナデ 輪横面	体部外・内面ヘラナデ	覆土下層	30%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 37	釉罽牟	5.8	1.4	0.9	71.4	滑石	側面に縦位の張り痕 底面に2重円の縦筋後渦巻き状の縦筋	覆土下層	PL16

第14号住居跡(第44・45図)

位置 調査区北西部のC38区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.03m、短軸3.71mの方形で、長軸方向はN-73°-Eである。残存している壁高は6~10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦であるが、硬化面は確認できなかった。

炉 中央部東寄りに付設されている。長径51cm、短径は推定47cmの円形で、床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床面は第2層上面で赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量

- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されていいる。

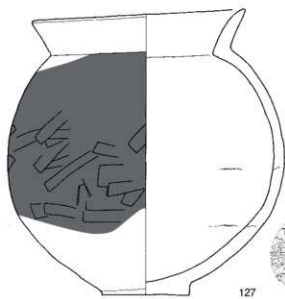
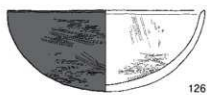
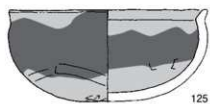
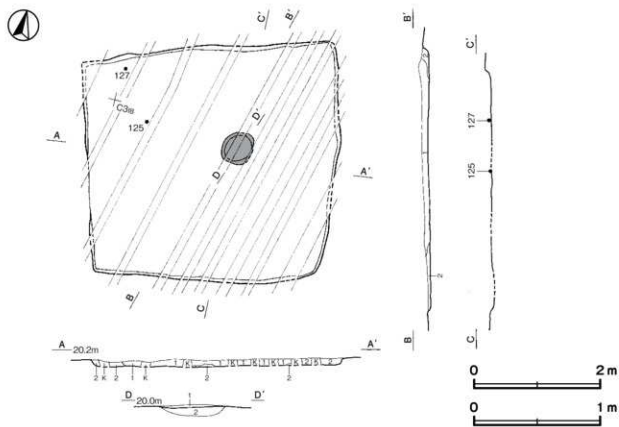
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

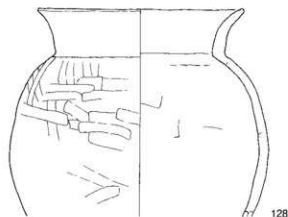
- 2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片104点(坏14、埴13、甕類77)が出土している。出土した土器片には細片も多く、後世の攪乱による影響を受けている。125・127は北西部の床面から出土している。

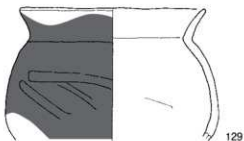
所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。



第44图 第14号住居跡・出土遺物実測図



128



129



第45図 第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表(第44・45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
125	土師器	坏	154	7.3	-	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ ナナデ 内面ヘラナデ	体部外面へう割り後へう 割り	床面	外・内面保存着 45%
126	土師器	坏	156	6.5	-	長石・石英・ 赤径・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ ナナデ 内面ヘラナデ	体部外面へう割り後へう 割り	覆土中	外面保存着 40%
127	土師器	甕	166	22.6	6.8	長石・石英・雲母・ 赤色粒子・礫	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ ナナデ 内面ヘラナデ	体部外面下底へう割り 後横位のヘラナデ	床面	外面保存着 90% PL13
128	土師器	甕	160	(16.4)	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ ナナデ 内面ヘラナデ	体部外・内面ヘラナデ 横横肌	覆土中	30%
129	土師器	甕	144	(10.4)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ ナナデ 内面ヘラナデ	体部外・内面ヘラナデ	覆土中	外面保存着 35%

第15号住居跡(第46～49図)

位置 調査区西部のC318区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.88m、短軸5.63mの長方形で、主軸方向はN-14'-Wである。壁高は18～25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、柱穴の周りや貯蔵穴付近が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っており、北西部や西壁際、炉の周辺で焼土や炭化材を確認した。

炉 4か所。炉1は中央部の北寄りに付設されている。長径93cm、短径は推定69cmの楕円形で、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉2は中央部に付設されている。南東部に攪乱を受けているため、長径は39cmで、短径は21cmしか確認できなかった。床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉で、炉床面は赤変硬化している。炉3は中央部南寄りに付設される。長径39cm、短径36cmの円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。炉4は中央部の西寄りに付設されている。長径57cm、短径は推定46cmの楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化している。それぞれの新旧関係は不明である。

炉1・4土層解説

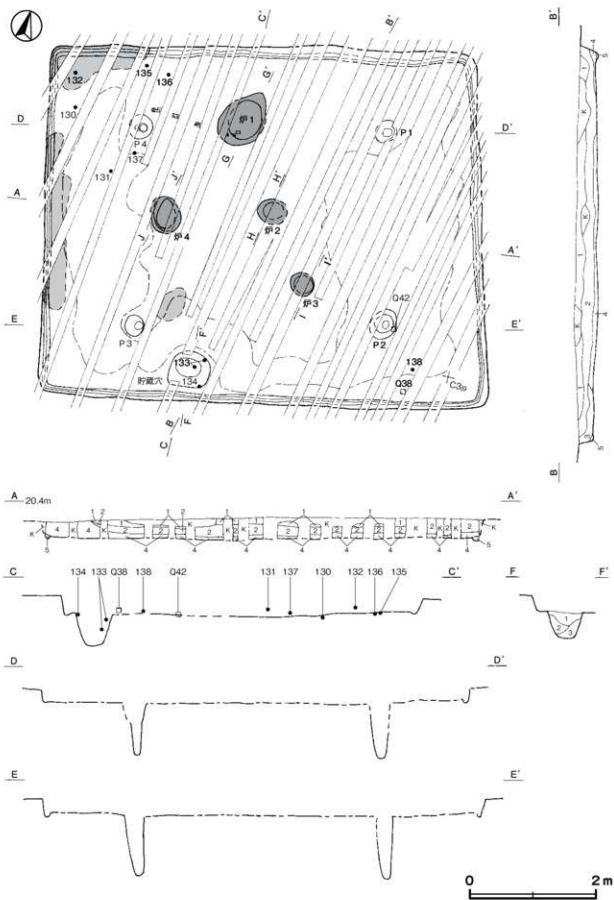
1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量

2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量

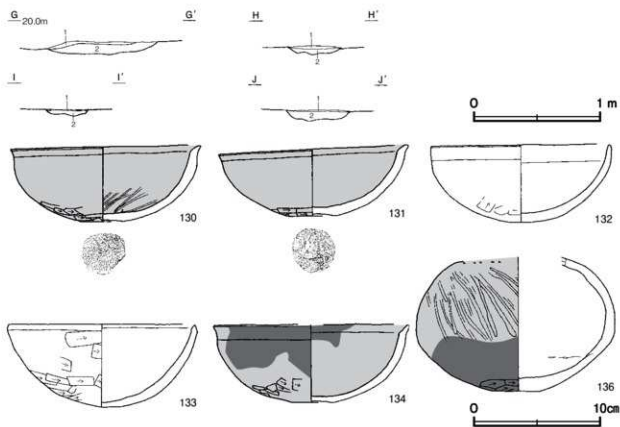
炉2・3土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量

2 にぶい赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量



第46图 第15号住居跡実測图



第47図 第15号住居跡・出土遺物実測図

ピット 4か所。P1～P4は、深さ82～102cmで、規模や配置から支柱穴である。

貯蔵穴 南壁の西寄りに位置している。長径67cm、短径58cmの楕円形である。深さは56cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 | 3 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

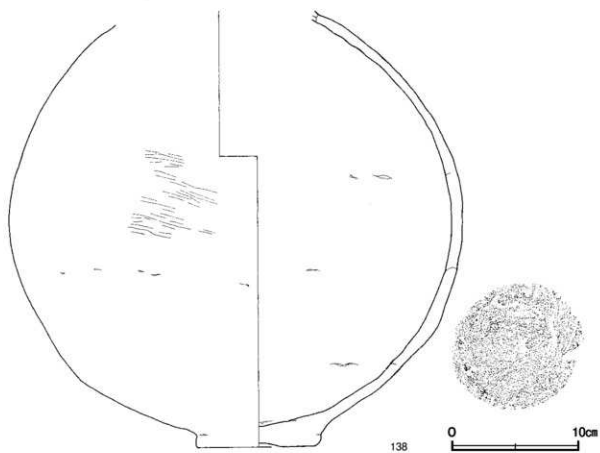
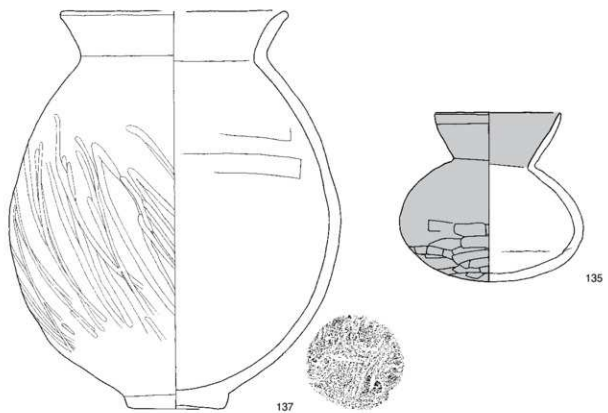
覆土 5層に分層できる。各層にロームブロックや焼土、炭化物が含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

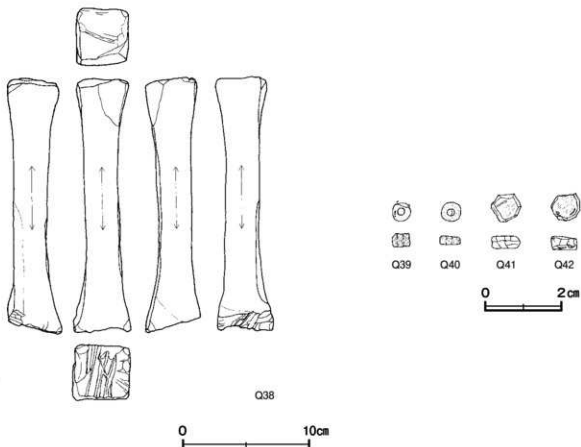
- | | | | |
|--------|-------------------------|-------|-----------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片328点（坏68, 埴2, 高坏2, 亮類256）、石器1点（砥石）、石製模造品2点（白玉2）、白玉未製品2点、滑石片1点が、北壁側と南壁側の覆土下層から床面にかけて出土している。また、出土した土器片には細片も多く、後世の擾乱による影響を受けている。130は北西部の床面から正位で出土している。135・136は北壁側、134は南壁の貯蔵穴付近の床面からそれぞれ出土している。131・132・137は北西部の覆土下層からそれぞれ出土している。138は南東部の覆土下層から潰れた状態で出土している。133は貯蔵穴覆土上層と中層から出土した破片が接合したものである。Q42はP2東側の床面から、Q38は南東部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。北西部や西壁際から焼土が確認されたこと、炭化材の出土状況などから焼失住居と考えられる。出土状況から、土器は第3層が埋め戻されると同時に北西部や南東側部から投棄されたものと想定される。



第48图 第15号住居跡出土遺物実測図(1)



第49図 第15号住居跡出土遺物実測図(2)

第15号住居跡出土遺物観察表(第47~49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
130	土師器	坏	149	6.0	3.4	長石・石英	にぶい赤黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 内部へう磨き	体部外面へう磨り後ナデ	床面	95% PL10
131	土師器	坏	150	5.5	3.6	長石・石英・礫	にぶい赤黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 内部磨成調整不可	体部外面へう磨り後ナデ	覆土下層	95%
132	土師器	坏	140	6.1	-	長石・石英	にぶい赤黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 内部ナデ	体部外面へう磨り後ナデ	覆土下層	80% PL10
133	土師器	坏	148	6.5	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内部ナデ	体部外面へう磨り後ナデ 体部外面二次焼成による赤彩剥離	野塚穴 覆土上層 中層	80% PL10
134	土師器	坏	[153]	6.1	3.1	長石・石英・赤色粒	赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 内部ナデ	体部外面へう磨り後ナデ	床面	乳・内面黒付着 45%
135	土師器	埴	9.8	13.4	-	長石・石英	明黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 内部ナデ	体部外面下位へう磨り後ナデ 体部外面上位ナデ 内部ナデ 輪縁痕	床面	95% PL12
136	土師器	埴	-	(106)	3.2	長石・石英	赤	普通	口縁部外・内面横ナデ 内部ナデ 輪縁痕	体部外面下位へう磨り後ナデ 体部外面上位へう磨り後ナデ 内部ナデ 輪縁痕	床面	外面黒付着 20%
137	土師器	甕	[176]	31.3	7.6	長石・石英・赤母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内部ナデ	体部外面へう磨り後ナデ 内部ナデ	覆土下層	50%
138	土師器	甕	-	(344)	9.7	長石・石英・赤母	にぶい赤黄	普通	口縁部外・内面横ナデ 内部ナデ	体部外面へう磨り後ナデ 内部磨成調整不可 輪縁痕	覆土下層	70%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 38	砥石	20.1	4.1	4.5	389.0	砂岩	紙面6面 両端部玉砥石に転用か	覆土下層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 39	白玉	0.5	0.3	0.2	(0.12)	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	覆土中	PL15
Q 40	白玉	0.5	0.2	0.2	0.12	滑石	両面平滑 円筒状 一方からの穿孔	覆土中	PL15
Q 41	白玉球殻	0.8	0.4	-	0.32	滑石	両面平滑 側面に研磨痕	覆土中	PL15
Q 42	白玉球殻	0.7	0.4	-	0.27	滑石	両面平滑 側面に研磨痕	床面	PL15

表2 古墳時代 堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸(長軸)方向	規模		階高 (cm)	床面	構造	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)
				長軸×短軸(m)	面積				柱穴	土口	ピット	伊・籠				
1	C 5a1	方形	N-21°-W	6.23 × 5.88	46-51	平坦	全周	4	1	2	伊2	1	人為	土師器、須恵器、土玉、鉄鍔	5世紀中葉	
2	C 4j3	方形	N-13°-W	7.25 × 7.02	45-64	平坦	一部	4	1	-	伊3	1	人為	土師器、須恵器、粘漆、瓦、瓦片、瓦葺、刀子	5世紀中葉	
3	D 4c5	方形	N-26°-W	7.28 × 7.17	44-58	平坦	全周	6	1	1	伊1	1	人為	土師器、須恵器、粘漆、瓦、瓦片、瓦葺、刀子	5世紀中葉	
4	D 5a5	長方形	N-26°-W	6.90 × 6.12	22-32	平坦	全周	3	1	1	伊5	1	人為	土師器、白玉	5世紀中葉	
5	C 5e1	長方形	N-27°-W	7.62 × 6.22	22-34	平坦	全周	4	1	-	伊2	-	人為	土師器、粘漆	5世紀中葉	
6	D 5b9	方形	N-27°-W	5.54 × 5.40	52-60	平坦	1段 全周	4	1	-	伊3	1	人為	土師器、白玉	5世紀中葉	
7	D 4f8	長方形	N-20°-W	5.36 × 3.66	20-31	平坦	-	-	-	1	伊3	-	人為	土師器	5世紀中葉	
8	C 4a5	方形	N-70°-W	3.48 × 3.24	38-45	平坦	-	-	-	1	伊1	1	人為	土師器、粘漆	5世紀中葉	
9	E 5e1	(方形)	N-23°-W	7.50 × 7.22	46-54	平坦	一部	4	1	-	伊3	-	人為	土師器、瓦孔内祝、漆	5世紀中葉	
10	E 5a5	長方形	N-5°-W	5.65 × 5.08	36-52	平坦	-	2	1	-	伊2	-	人為	土師器、瓦孔内祝、漆	5世紀中葉	
11	D 5f4	方形	N-81°-E	4.45 × 4.15	14-17	平坦	半分	-	-	-	伊1	-	人為	土師器、粘漆	5世紀中葉	
12	D 4g6	長方形	N-68°-E	3.15 × 2.67	17-22	平坦	-	-	-	-	伊1	-	人為	土師器	5世紀中葉	
13	C 4b2	長方形	N-58°-E	6.21 × 4.57	21-34	平坦	全周	-	-	-	伊1	1	人為	土師器、粘漆	5世紀中葉	
14	C 3f8	方形	N-73°-E	4.03 × 3.71	6-10	平坦	-	-	-	-	伊1	-	人為	土師器	5世紀中葉	
15	C 3f8	長方形	N-14°-W	6.88 × 5.63	18-25	平坦	全周	4	-	-	伊4	1	人為	土師器、瓦葺、白玉	5世紀中葉	

(2) 土坑

第1号土坑(第50～52図)

位置 調査区北西部のC 4 f5区、標高20 mほどの平坦な台地上に位置している。

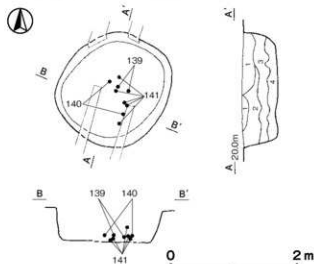
規模と形状 長径1.79 m、短径1.65 mの円形である。深さは53 cmで、底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックや炭化物が含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

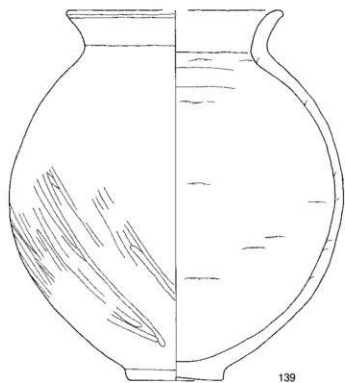
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量



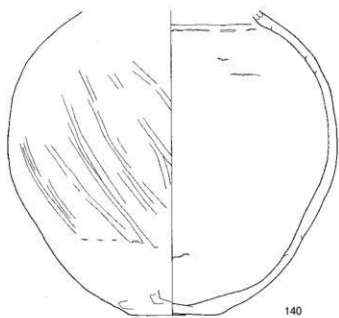
第50図 第1号土坑実測図

遺物出土状況 土師器片552点(坏80、高坏13、甕類459)、須恵器1点(甕)が、中央部の覆土下層から底面にかけてまとまって出土している。また、出土した土師器片には攪乱によって破損した細片も多く、坏片や高坏片は復元することができなかった。139・140は中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。141は中央部の覆土下層から底面にかけて出土した破片が接合したものである。

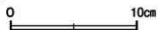
所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。覆土下層から底面にかけて多量の土器片が出土していることから廃棄土坑と考えられる。



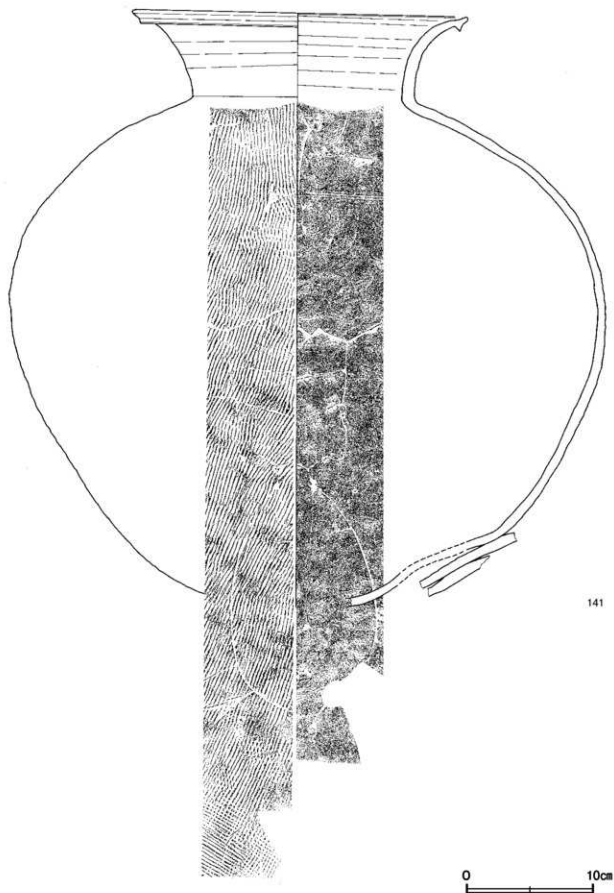
139



140



第 51 图 第 1 号土坑出土物实测图 (1)



第 52 图 第 1 号土坑出土遺物实测图 (2)

第1号土坑出土遺物観察表 (第51・52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
139	土師器	甕	[168]	29.2	7.6	長石・石英・ 雲母・絹織	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ フナデ 内面ヘラナデ	体部外面へう割り後へ 輪襷	覆土下層	40%
140	土師器	甕	-	(24.0)	7.2	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐色	普通	体部外面へう割り後ヘラナデ 内面厚底調整不明 輪襷	内面厚底調整不明 輪襷	覆土下層	40%
141	須恵器	甕	26.2	(46.9)	-	長石	灰	良好	口縁部外側横ナデ 内面ヘラナデ 口縁部下に 将 体部外側平行叩き 内面の当て具痕をナデ により磨り削る		覆土下層～ 底面	60% PL14

第5号土坑 (第53図)

位置 調査区西部のC30区、標高20mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 確認された長径は0.75m、短径0.73mである。東部が調査区域外のため楕円形と推定される。長径方向はN-79°-Wである。深さは26cmで、底面は皿状であり、壁は外傾して立ち上がっている。

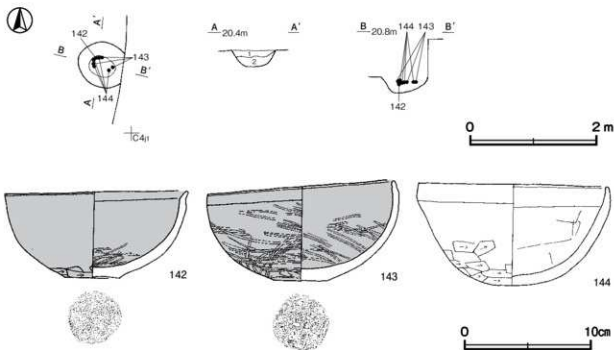
覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 2 褐色 色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片4点(坏2、碗1、甕類1)が出土している。142～144は中央部の覆土中層からま
とまって出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。土器の出土状況から廃棄土坑と考えられる。



第53図 第5号土坑・出土遺物実測図

第5号土坑出土遺物観察表 (第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
142	土師器	坏	14.4	7.0	4.2	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラナデ	体部外面へう割り後ナデ	覆土中層	95% PL11
143	土師器	坏	14.4	8.1	4.2	長石・石英・ 赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面へう割り	体部外面へう割り後縦 溝のへう割り	覆土中層	85% PL11
144	土師器	碗	14.8	8.0	-	長石・石英・ 雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラナデ	体部外面へう割り後ナデ	覆土中層	80% PL11

表3 古墳時代 土坑一覽表

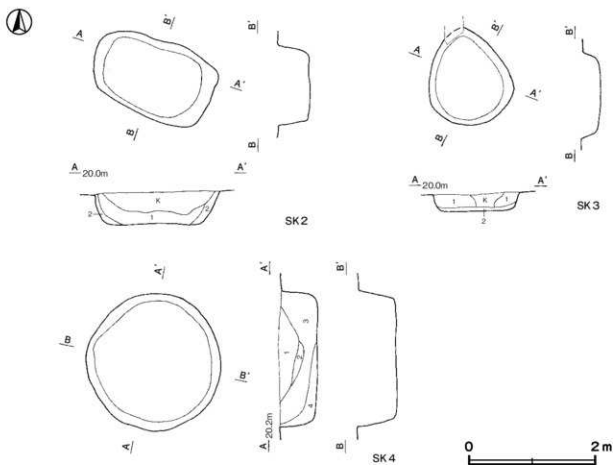
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	C 4 区	-	円形	1.79 × 1.65	53	平坦	外堀	人為	土師器, 須恵器	
5	C 3 区	N-79-W	[楕円形]	0.75 × 0.73	26	皿状	外堀	人為	土師器	

2 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期を明らかにすることができなかった土坑3基、溝跡1条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑 (第54図)

土坑については、実測図と一覽表で示し、併せて土層解説を記載する。



第54図 第2・3・4号土坑実測図

第2号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第3号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック

第4号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 4 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

表4 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
2	C514	N-70°-W	溝丸長方形	1.96×1.23	50	平坦	外傾	人為	土師器	
3	D5e4	N-11°-W	不整形円形	1.58×1.32	24	平坦	外傾	人為	土師器	
4	D546	-	円形	2.17×2.15	60	平坦	外傾	人為	土師器	

(2) 溝跡

今回の調査で、時期・性格ともに不明の溝跡1条を確認した。平面図については遺構全体図に掲載する。

第1号溝跡 (第55図・付図)

位置 調査区南部のE4g5～E5f9区、標高20mほどの南緩斜面部に位置している。

規模と形状 南部のE4g5区から北東方向(N-20°-E)に2.1mほど延び、東方向(N-76°-E)へ屈曲した後、緩やかに彎曲しながら62.2m延び、東側の調査区域外へ緩やかに下っている。両端が調査区域外に延びているため、長さは64.3mしか確認できなかった。上幅0.62～1.3m、下幅0.14～0.48m、深さ0.12～0.46mである。断面は浅いV字状で、壁は外傾して立ち上がっている。底面の標高は、南端部が19.077m、中央部東側が19.875m、東端部が19.760mで、中央部東側部から両端部に向かって緩やかに傾斜している。

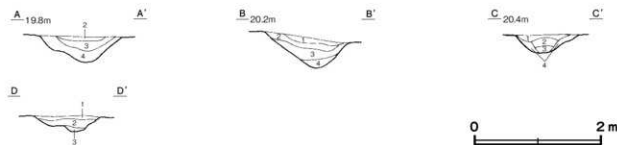
覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
3 におい褐色 ロームブロック微量
4 褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片28点(壳類)が出土しているが、細片のため図示することができない。

所見 時期判断できる遺物が出土していないため、時期は不明である。台地上から低地へ向かって延びていることから排水溝の可能性がある。



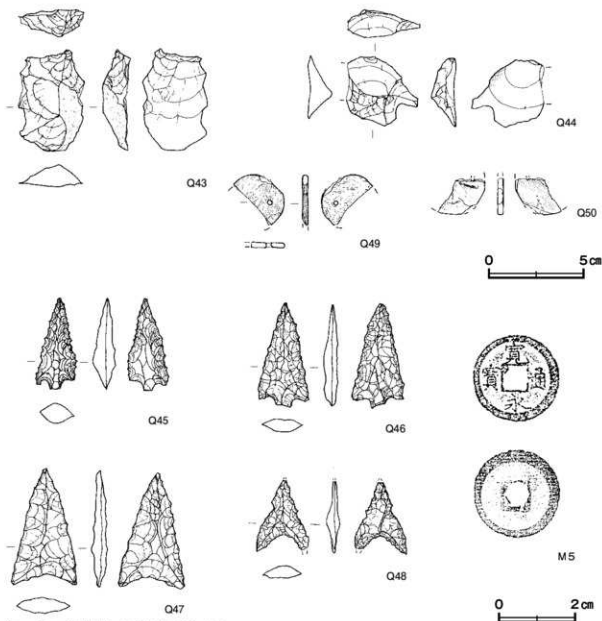
第55図 第1号溝跡実測図

(3) 遺構外出土遺物(第56・57図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第56図 遺構外出土遺物実測図(1)



第57図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第56・57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
145	原産器	坏	(10.6)	(3.7)	—	長石・石英	灰黄緑	良好	ロケロ整形 口縁部・底部ロケロナデ	表土	20%
番号	種別	器種	胎土		色調	手法の特徴ほか			出土位置	備考	
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・白色砂子		にぶい橙	半筋縄文VLを地文 棒状工具による沈陥 沈陥間を磨り削し			表土		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q 43	箭片	5.5	3.6	1.5	24.3	安山岩	縦長箭片 上部部に調整を伴う不規則な割離 主要割離面の割離方向に対し同一方向・横方向からの割離		C 4 3 区	PL15	
Q 44	箭片	3.7	(3.9)	1.4	(11.4)	頁岩	横長箭片 調整を伴う不規則な割離後打面転移		D 5 g3 区	PL15	
Q 45	鏃	2.4	1.0	0.5	0.78	チャート	有葉鏃 両面割離調整 押圧割離		D 4 8 区	PL15	
Q 46	鏃	2.7	1.3	0.4	1.18	チャート	有葉鏃 両面割離調整 押圧割離 基部欠損		E 5 c9 区	PL15	
Q 47	鏃	3.1	1.8	0.4	1.5	チャート	四基無葉鏃 両面割離調整により三稜を有す 押圧割離		C 4 c2 区	PL15	
Q 48	鏃	(1.9)	1.4	0.4	(0.47)	チャート	四基無葉鏃 両面割離調整により三稜を有す 押圧割離 先端部欠損		J 4 c7 区	PL15	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 49	瓦孔内版	(26)	(27)	0.3	(284)	滑石	丁寧な研削調整 孔径0.15cm 一方向からの穿孔	表土	
Q 50	瓦孔内版*	(19)	(25)	0.3	(23)	滑石	丁寧な研削調整	表土	

番号	種別	器名	径	孔距	重量	材質	初測年	特徴	出土位置	備考
M 5	銭貨	寛永通寶	2.4	0.6	2.48	銅	1668年	無背紋 寛文8年 新寛永	C 5al区	PL16

第4節 ま と め

1 はじめに

今回の調査で、古墳時代の竪穴住居跡 15 軒、土坑 2 基の他に、時期が特定できない土坑 3 基、溝跡 1 条を確認した。

ここでは遺物や遺構にみられる特徴について概観するとともに、西谷田川や高岡川流域の同時期の遺跡との比較をし、若干の考察を加えてまとめたい。

2 当遺跡の出土土器について

当遺跡では、竪穴住居跡 15 軒が確認され、多くの土器が出土している。遺構の時期判定については、県南地域における土器編年研究¹⁾を参考とし、これまでに報告書等に掲載されている事例や資料を加味しながら検討を行った。いずれの遺構も 5 世紀中葉（古墳時代中期）と判断した。

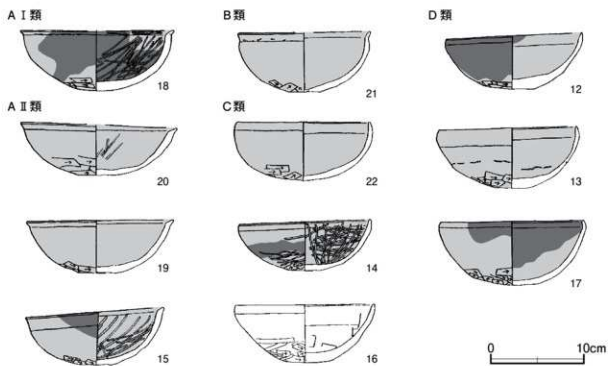
以下、出土遺物と遺構について述べる。

(1) 土師器について

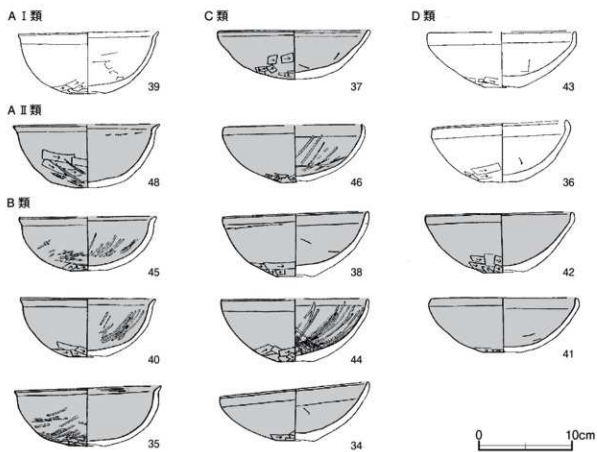
今回、報告書に掲載した土器総数は 145 点である。内、須恵器はわずかに 5 点で、それ以外の 140 点が土師器（ミニチュア土器、手捏土器を含む）である。主な器種としては坏・碗・埴・高坏・甕・瓶で、なかでも坏の出土数が 60 点（42.9%）と多い。次いで多い器種は甕の 43 点（30.7%）で、この二つの器種で全体の 7 割以上を占めている。これらの土器の中で、出土量も多く形態変化について見極めやすい坏をとりあげ、当遺跡の特徴について述べていくこととする。

古墳時代中期の坏は、櫻村宜行氏の編年によるとⅡ期で出現する²⁾と言われている。後続するⅢ期になると坏の量が増加し、様々な器形がみられるようになる。当遺跡でも様々な形態の坏が出土している。便宜上、口縁部が「く」の字状に屈曲し外傾するものを A 類（その中で強く外傾するものは A I 類、わずかに外傾するものは A II 類とする）、体部が上位で内彎し口縁部が外反するものを B 類、体部から口縁部にかけて直立、もしくは内彎しながら立ち上がるものを C 類、口縁部と体部の境で内面に屈曲するものを D 類とに分ける。また、この時期の坏の底部は大部分が平底（一部丸底のものもある）で、赤彩率が高いことが特徴である。このような視点で第 2・3 号住居跡から出土した坏（第 58・59 図）を例に見ていくと、A I 類から D 類まで存在し種類が多い、平底の割合が多い、赤彩率が高いなどの特徴が見て取れる。

まず、第 2 号住居跡では、18 は口縁部が「く」の字状に屈曲し内側に後が認められることから A I 類、15・19・20 は、口縁部が「く」の字状にわずかに外傾していることから A II 類にそれぞれ該当する。21 は体部の上位が内彎していることから B 類に該当する。14・16・22 は口縁部まで内彎しながら立ち上



第 58 圖 第 2 号住居跡出土坯



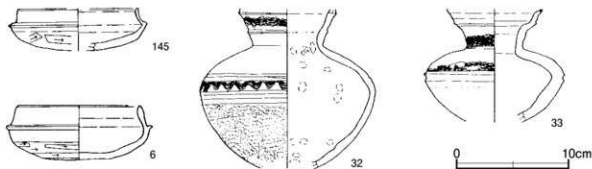
第 59 圖 第 3 号住居跡出土坯

っていることからC類に該当する。12・13・17は、口縁部と体部の境でわずかに屈曲していることからD類に該当する。第3号住居跡では、39がAⅠ類、48がAⅡ類、35・40・45がB類、34・37・38・44・46がC類、36・41・42・43がD類にそれぞれ該当する。

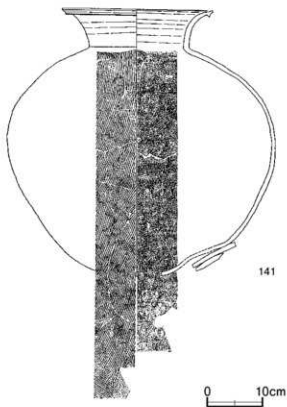
他の住居跡から出土している坯もAⅠ類～D類のいずれかに該当し、この時期の坯の特徴を示している。また、赤彩された坯は60点中46点(76.6%)にのほり、高い割合で赤彩されている。平底は60点中41点(68.3%)で割合が高い傾向にあり、一部丸底も存在している。これらのことから、当遺跡から出土している坯が5世紀中葉の特徴を示していることが分かる。

(2) 須恵器について

当遺跡では、搬入品と考えられる須恵器5点(坯2、甕2、甕1=第60図)が出土している。6の坯身は、口縁部の立ち上がりやや高く、端部まで内傾して立ち上がり、端部はやや尖っている。底部の調整は回転ヘラ削りであり、その後手持ちヘラ削りで仕上げている。焼成は良好である。145の坯身は、口縁部の立ち上がりやや低いが端部まで内傾して立ち上がり、6とは違って端部は平坦である。底部調整は、6と同様に



回転ヘラ削りに手持ちのヘラ削りで仕上げ調整している。焼成は良好である。これらの特徴を有する須恵器は、陶邑須恵器編年³⁾によるとTK216型式併行と考えられる。32の甕は、口縁部や底部、円孔を欠損している。頸部に2本の稜を持ち、稜の間に波状文が施紋されている。体部の最大径を挟んで上下に2条の沈線を巡らし、沈線間に波状文を充填している。体部下位は多方向の平行叩きで仕上げている。同じ住居跡から出土している33の甕は、32と同様に口縁部や底部、円孔を欠損している。頸部に1条の稜を持ち、その下に波状文が施紋されている。体部最大径に2条の沈線を巡らし、沈線の上に波状文を施文している。体部下位は回転ナデ調整である。これらの特徴を有する須恵器は、陶邑須恵器編年によると、32はTK208型式併行、33は同じくTK216型式併行と考えられる。141の甕は、頸部から口縁部にかけて、外・内面ともにナデによる仕上げをし、口縁部下に稜を持っている。体部外面は縦位の平行叩きである。体部内面は、同心



第60図 古館明神脇遺跡出土須恵器

円状の当て具痕を磨り消している。口縁部下の稜がシャープで、体部内面の当て具痕を磨り消しているなどの特徴から、陶器須恵器編年においてTK216～TK208型式と併行であると考えたい。

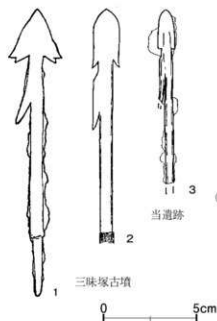
3 集落の様相

(1) 遺構を中心に

今回の調査で確認した住居跡は15軒で、D5a1を中心とした広場を取り囲むようにして楕円形状に配置されている(第62図)。これらの住居跡は、第3・12号住居跡、第4・11号住居跡、第8・13号住居跡、第14・15号住居跡のように、比較的大形の住居跡と小形の住居跡が組になっていることが分かる。このような例は根崎遺跡⁴⁾や鳥名ツツバタ遺跡⁵⁾などでも報告され、建物の機能の違いを指摘している。また、下河原崎谷中台遺跡⁶⁾でも単位集団のまとまりの中で建物の機能の違いが指摘されている。当遺跡では、大形の住居跡から小形の住居跡までの距離が概ね9～12mであり、小形の住居跡は柱穴をもたないという特徴がある。第1・5・9号住居跡なども組になる建物があると想定されるが、調査区域外に存在すると考えられる。

当遺跡では、組になっている住居跡の中で、主体となる住居跡からの遺物の出土が多いという傾向を示している。中でも、第2・3号住居跡は復元できる土器の数が他を圧倒している。第2号住居跡からは、炭化材や焼土塊に混じて土器が出土しており、意図的に焼却された住居と判断した。本跡からは坏や甕などの日常雑器だけでなく搬入品と考えられる須恵器の甕2点が出土している。その内33は床面から出土しており、体部や底部に二次焼成が認められ、住居廃絶に伴う意図的な焼却の段階で遺棄、または投棄されたと考えられる。32は北西コーナー部の覆土中層からの出土で、廃絶後の窪地に投棄されたと考えられる。同じ西谷田川沿いの鳥名ツツバタ遺跡では須恵器の坏や甕が、下河原崎谷中台遺跡では坏や把手付碗が出土している。いずれも搬入品であることから、他地域との交流や有力者の存在が想定されている。当遺跡でも同様で、搬入品の須恵器を手に入れるだけの有力者がいたと考えられる。

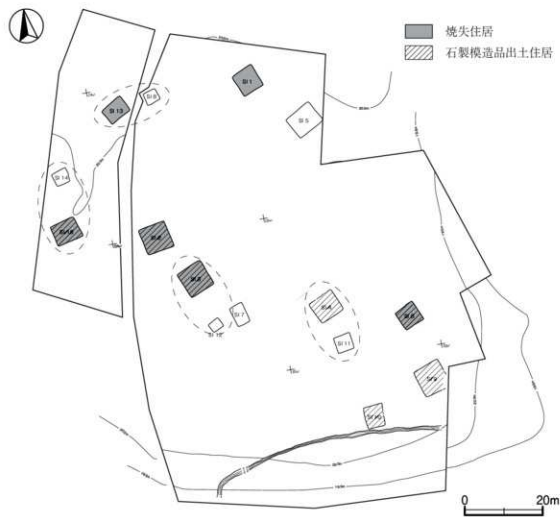
第3号住居跡も意図的に焼却された住居である。本跡からは独立片逆刺鉄鎌(第61図)が床面から出土している。このような形の鉄鎌は出土例が少なく、県内では三味塚古墳⁷⁾(鎌身が三角形タイプ=1と長三角形タイプ=2)と実穀古墳群の第4号墳⁸⁾(三角形タイプ)で出土している⁹⁾。本跡は、北壁側に貯蔵穴を持ち、東西壁にそれぞれ間仕切り溝が確認されている。また、主柱穴が6か所あり、当遺跡の中でも特異な構造を持っている。下河原崎谷中台遺跡でも本跡と同様の住居跡が確認されており、搬入品の須恵器(坏=TK216型式)が出土していることから有力者の存在が指摘されている¹⁰⁾。



第61図 独立片逆刺鉄鎌実測図

(2) 遺跡の性格について

当遺跡と同じ時期の集落が確認されている遺跡は、西谷田川や高岡川沿いに鳥名ツツバタ遺跡、下河原崎谷中台遺跡、元宮本前山遺跡、真瀬三度山遺跡、上萱丸古屋敷遺跡、谷田部漆遺跡、根崎遺跡、西栗山遺跡などが点在している。これらの遺跡と当遺跡に共通することは、「須恵器や鉄鎌などの特別な遺物の出土」「石製模造品の出土」「焼失住居の検出」などがあげられる。



第62図 遺構分布図

当遺跡における須恵器や独立片逆刺鉄鎌は、威信財としての意味合いが強いと思われ、それらを持つ有力者の存在を想起させる。威信財となるものは、容易に入手することができないものが多く、地位や権威を示し、所有者と非所有者との差別化を図るものであろう。当遺跡の有力者はそれらを手に入れるだけの力を持ち、その力を背景に集落支配を行っていたことが推測できる。また、石製模造品の出土は、祭祀的な行為が想定され、第2・4・6・9・10・15号住居跡で白玉や双孔円板を用いた祭祀が行われたと考えられる。中でも、第3号住居跡からは白玉10点、双孔円板7点（未製品2点を含む）、第4号住居跡からは白玉6点がそれぞれ集中して出土している。さらに、焼失住居の検出は、住居の廃絶に伴い意図的に焼却した可能性が想定され、第1・3・6・13・15号住居跡がそれに当たると考えられる。可能性のある第7号住居跡を含めると7軒になる。中でも第1～3号住居跡から出土した遺物は二次焼成を受けているものが多い。当遺跡では、特別な遺物や石製模造品が出土したり、意図的に焼却されたりしている住居跡は、組になっている住居跡の中で主体を成すものか組になる住居跡が想定されるものに多い傾向がある。

祭祀的な行為や意図的な焼却行為は、当遺跡だけでなく西谷田川沿いの遺跡でも行われていたことが明らかになっている。これは、この地に共通の精神文化が浸透していたことを裏付けるだけでなく、ある一定の形式に則って行われていたことをうかがわせている。これらのことを巨視的にとらえたとするならば、当時の支配

体制や社会情勢、精神文化がこの地に於いて共有されていたととらえることができる。しかし、微視的に見ると各遺跡の立地条件や有力者層の出自背景による違いもあるであろう。

当遺跡の時代は、畿内において抜きん出た力を持つものが表れ、揺るぎない権力を確立した時代である。このような畿内の動きは地方にも伝播し、為政者に対する政治的な情報や生活に関する情報を含めた様々な情報が広まったと考えられる。そして、情報の伝播の過程で地域の統合が促されたと考える。当遺跡において、搬入品の須恵器が出土したことや関東以西で出土例が多い独立片逆刺鉄鏝が出土したこともこの一連の流れの中で説明できよう。また、当遺跡と同じ台地に所在する西栗山遺跡¹¹⁾で韓式系土器の模倣土器が出土し、根崎遺跡¹²⁾で鈴鏡形土製模倣造品が出土していることも情報の直接的・間接的影響と考えられる。

4 結び

これまで、調査で明らかになったことをもとに当遺跡について述べてきた。土器の様相や住居跡が垣になっていること、祭祀的行為や意図的な焼却行為などについて指摘してきた。威信財と思われる遺物が出土した背景についても私見を述べてきた。しかし、限られたことを述べたに過ぎず、当遺跡がどのような目的で開かれた集落なのか、時期は一時期なのかなどについて具体的に踏み込むことはできなかった。

当遺跡と同じ台地に所在する西栗山遺跡は7世紀代まで集落が継続し、根崎遺跡は平安時代まで継続している。当遺跡と同時期の西谷田川沿いの各遺跡も同様で、断続的ながらも継続していることが明らかになっている。

遺跡の立地から見れば、今回の調査区の北西側に遺跡が広がっていると考えられ、前後する時代の集落の存在が想定できるが推測の域を脱しない。今後、当地域における資料が増加することを待ち、当遺跡の様相についてさらに明らかにされることを願って結びとしたい。

註

- 1) a 櫻村宣行「和泉土器編年考-茨城県を中心として-」[研究ノート] 5号 茨城県教育財団 1995年3月
b 櫻村宣行他「茨城県における5世紀の動向」[東国土器研究] 5号 1999年5月
- 2) 註1に同じ
- 3) a 田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981年7月
b 「年代のものさし-陶色の須恵器-」大阪府立近つ飛鳥博物館図録40 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006年1月
- 4) 寺内久水「西栗山遺跡2 根崎遺跡2 萱丸一休型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」[茨城県教育財団文化財調査報告] 第349集 2011年3月
- 5) 菅川修「高名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1」[茨城県教育財団文化財調査報告] 第203集 2003年3月
- 6) a 高野裕暉「元宮本前山遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」[茨城県教育財団文化財調査報告] 第265集 2006年3月
b 斎藤真弥「下河原崎谷中台遺跡 下河原崎高山古墳群 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4」[茨城県教育財団文化財調査報告] 第292集 2008年3月
- 7) 斎藤大・大塚初重・川上博義「三味塚古墳 茨城県行方郡玉造町所在」 茨城県教育委員会 1990年9月
- 8) 浅野和久「荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 実穀古墳群・実穀寺子遺跡1」[茨城県教育財団文化財調査報告] 第144集 1999年3月
- 9) 当遺跡の鉄鏝については、稲田健一氏に実現していただき御教示いただいた。御教示に感謝したい。
- 10) 註6 b)に同じ
- 11) 註4に同じ
- 12) 註4に同じ

写 真 图 版



古館明神脇遺跡出土土器

第 1 号住居跡
遺物出土状況



第 1 号住居跡
完掘状況



第 2 号住居跡
完掘状況



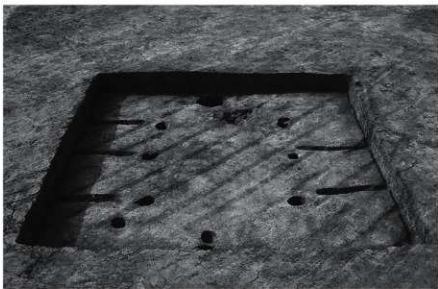
PL2



第3号住居跡
遺物出土状況



第3号住居跡
貯藏穴遺物出土状況



第3号住居跡
完掘状況

第 4 号住居跡
完 掘 状 況



第 5 号住居跡
完 掘 状 況



第 6 号住居跡
完 掘 状 況



PL4



第7号住居跡
完掘状況



第8号住居跡
遺物出土状況



第8号住居跡
遺物出土状況

第8号住居跡
完掘状況



第9号住居跡
完掘状況



第10号住居跡
完掘状況



PL6



第12号住居跡
遺物出土状況



第12号住居跡
完掘状況



第13号住居跡
完掘状況



第 15 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 1 号 土 坑
完 掘 状 況



第 1 号 溝 跡
完 掘 状 況

PL8



第2号住居跡出土土器



第3号住居跡出土遺物



第1・2・5・6号住居跡出土土器

PL10



第2・3・5・7・15号住居跡出土土器



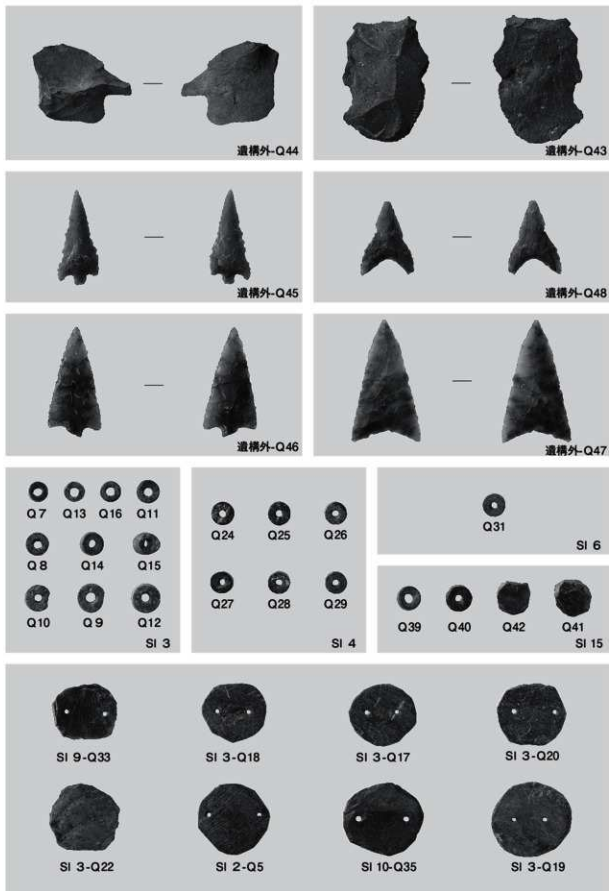
第1·3·6号住居跡，第5号土坑出土土器





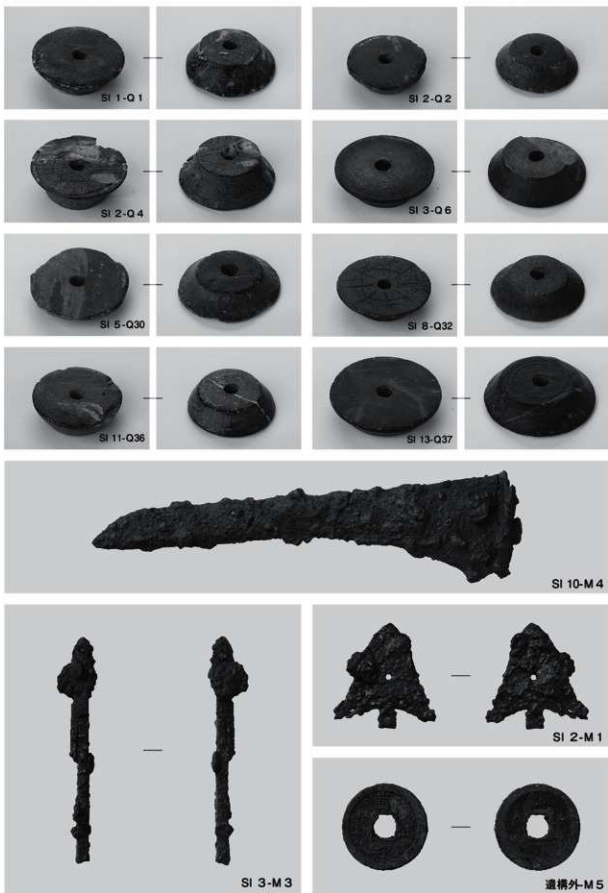


第2·3·6·8号住居跡，第1号土坑出土土器



第2・3・4・6・9・10・15号住居跡，遺構外出土石器・石製模造品

PL16



第1・2・3・5・8・11・13号住居跡出土石器, 第2・3・10号住居跡, 遺構外出土金属製品

抄 録

ふりがな	ふるだてみょうじんわきいせき							
書名	古館明神脇遺跡							
副書名	萱丸一体型特定地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第369集							
著者名	綿引英樹							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2013(平成25)年3月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
古館明神脇遺跡	茨城県つくば市 大字古館字神足脇 145-2番地ほか	08220 - 617	36度 00分 41秒	140度 04分 22秒	20m	20090401 ~ 20090831	10,128㎡	萱丸一体型特定地区画整理事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
古館明神脇遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡 土坑	15軒 2基	土師器(坏・甕・埴・高坏・壺・甕・甗・ミニチュア土器・手捏土器)、須恵器(坏・甕・甗)、土製品(土玉)、石器(鐵・紡錘車・砥石)、石製模造品(白玉・双孔円板)、鉄製品(刀子・鐵・鎌)		第3号住居跡からは、県内でも類例の少ない独立片逆刺鉄鐵が出土している。	
	その他	時期不明	土坑 溝跡	3基 1条	縄文土器、土師器(坏・甕)、須恵器(坏)、石器(剥片・鐵)、錢貨(寛永通寶)			
要約	古墳時代中期の集落であることが分かった。住居は広場を中心に楕円形に配置され、大形の住居と小形の住居が組み合わさって構成されている。使う目的によって建物を分けていた可能性がある。また、搬入品の須恵器や類例の少ない鉄鐵が出土し、有力者の存在が推測される。							

仕 様

- 編 集 O S Microsoft Windows 7
Home Premium Service Pack 1
- レイアウト Adobe InDesign CS5
- 図版作成 Adobe Illustrator CS5
- 写真調整 Adobe Photoshop CS5
- Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000ED
- 組 版 OpenType13級リウミンPro・L 基本
Adobe InDesign CS5
- 印 刷 オフセット印刷
- 写真製版 スクリーン線数 モノクロ175線 カラー210線
- ・印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトしたものを入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第369集

古館明神脇遺跡

壹丸一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成25 (2013) 年 3月12日 印刷

平成25 (2013) 年 3月15日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

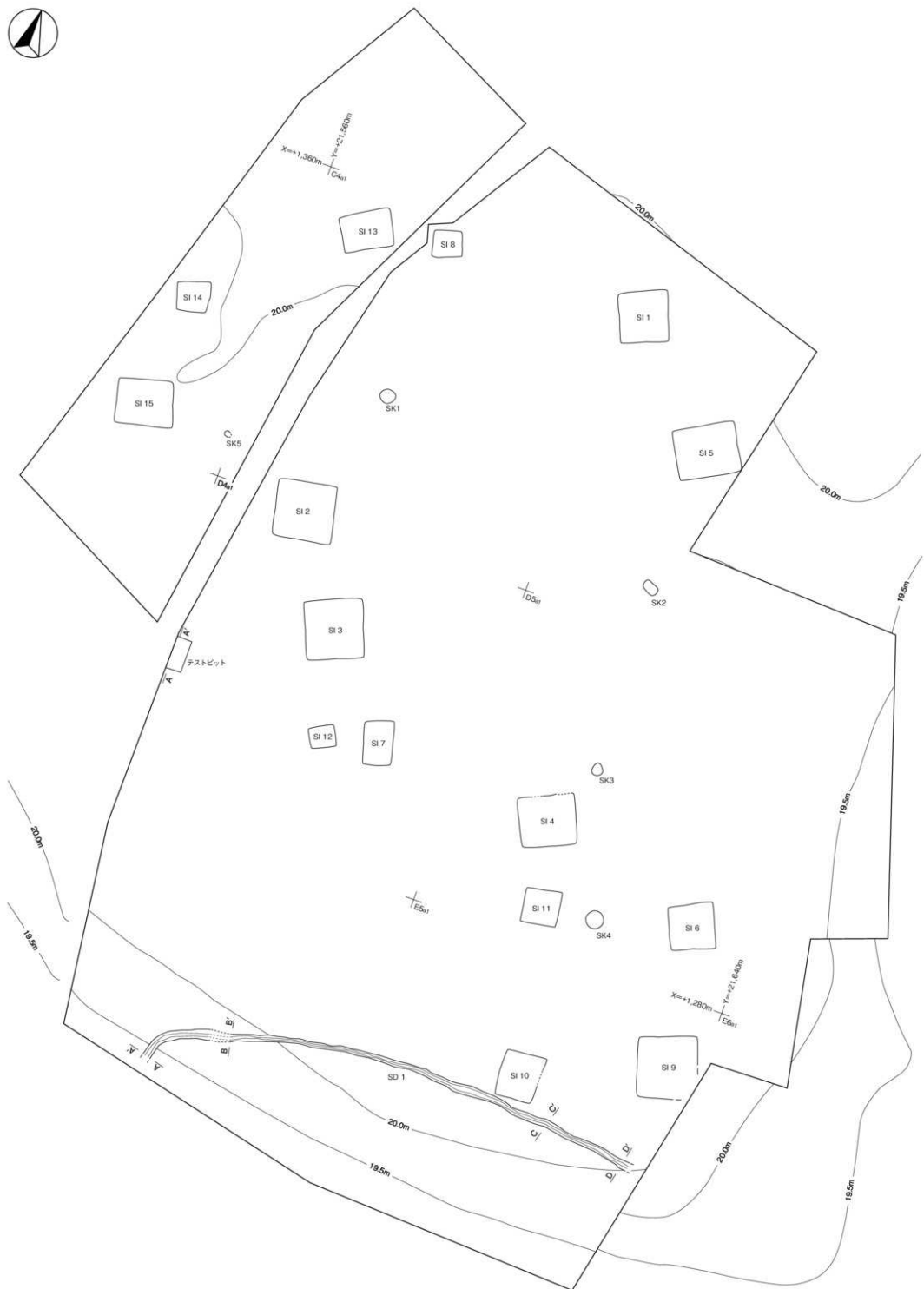
TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 八幡印刷株式会社

〒311-4152 水戸市河和田1丁目1704番12号

TEL 0120-23-1473



付図 古館明神脇遺跡遺構全体図(「茨城県教育財団文化財調査報告」第369集)

